幼兒の教育

第三十九卷　一月號　第一號

東京女子高等師範學校內
日本幼稚園協會

生徒募集

本科生四十名
研究科生若干名

願書受付三月二十日迄規則書は參錢切手封入の上申込まれよ。

創立以來廿四年。
大正五年東京市麹町區に創立。
昭和二年武藏野の中なる現在地に新築、附近に森あり、野あり、川ありて四時自然の恩惠を受け、本校の特色とする自然觀察、博物採集、圖畫寫生、自然物應用の手工等材料豐富なり。

玉成保姆養成所

所長　ソフアヤ・アラベラ・アルウヰン
東京市杉並區西高井戸一丁目一三三
省線　西荻窪下車直南約五丁

賀正

昭和十四年元旦

日本幼稚園協會

生徒募集

募集人員　七拾名

出願期限　自二月一日　至三月末日

○入學手續ヲ簡易ニ改メタリ

○入學試驗ヲ要セズ　提出書類ニヨリ詮衡ノ上直チニ許可書ヲ送付ス

○無試驗檢定ニヨリ保姆免許狀ヲ受クル特典アリ

○寄宿舍ノ設備アリ

規則書入學案內ハ參錢切手封入申込マルベシ

東京市品川區大井原町五二〇八（省線大井町驛ヨリ城南バスニテ原停留場下車二分）

東京昭和保姆養成所

所長　土川五郎

顧問兼講師　東京女子高等師範教授　倉橋惣三

生徒募集

一、募集人員　四十名

一、出願期日　三月三十日まで

○無試驗檢定にて保姆免許狀を受く

○帝都の巨刹寶仙寺の山内に同寺經營の感應幼稚園並中野高等女學校と共に併設せられ總敷地六千餘坪、環境の清澄、施設の優秀を特色とす

○交通は省線新宿驛より五分

○寄宿舍あかつき寮の設備あり

詳細は學則請求を乞ふ

東京市中野區宮前町

佛教保育協會　保姆養成所

電話中野五八七〇番

保姆生徒募集

一、募集人員　五十名

一、出願期限　二月一日ヨリ受付

規則及入學案内ハ三錢切手ヲ同封シテ請求セラル、カ又ハ山手線目白驛前目白幼稚園ニ就キ承合セラレタシ

淀橋區下落合三丁目一、三八八

東京目白保姆學校

電話落合長崎二五五九番

保育實習科新卒業者

東京女子高等師範學校保育實習科は昭和十四年三月、左の二十四名の新卒業者を保育界に送り出さうとしてゐます。皆それ〴〵適當な働き場所を得て斯界の爲熱心にその職に從事し度い希望に燃えてゐます。

氏名	出身校	生年月日
淺見 あい	東京 實踐高等女學校	大正十年三月十九日
石川 靖子	東京 立正高等女學校	大正十年三月一日
遠藤美也子	日本女子大學校附屬高等女學校	大正九年五月七日
大橋 美代	東京 櫻蔭高等女學校	大正九年七月二十一日
川村 フミ	大連 神明高等女學校	大正十年七月二十三日
上遠 文子	東京 青山學院高等女學部	大正十年一月二日
小島 七重	東京府立第五高等女學校	大正九年七月七日
越山 久子	東京府立第五高等女學校	大正九年四月十七日
齋藤 公子	宮城縣第一高等女學校	大正九年九月五日
鈴木 靜	東京府立第六高等女學校	大正十年二月七日
田中 光子	愛知 淑德高等女學校	大正九年十一月二十二日
高宮 愛子	千葉 町立野田高等女學校	大正九年十二月五日
佃 悅子	廣島縣立三原高等女學校	大正十年五月十六日
所 雅代	神奈川高等女學校	大正十年六月十五日
富永 百合	東京府立高等家政女學校	大正十年五月二十九日
中島 鈴子	千葉縣立佐原高等女學校	大正十年九月八日
長坂 靜枝	新潟縣立佐渡高等女學校	大正十年十二月二十四日
橋本 せい	東京府立第八高等女學校	大正九年十月二十八日
久永 敏子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正九年八月十日
本多 良江	東京府立第一高等女學校	大正十年一月二十四日
松平 仁	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正十年二月十五日
依田 義子	東京女子高等師範學校附屬高等女學校	大正九年十月一日
横倉 文子	栃木縣立宇都宮第一高等女學校	大正十年四月十日
吉井 正子	群馬縣立前橋高等女學校	大正十年十一月十六日

倉橋惣三編（新刊）

新體幼稚園唱歌

目次

日本の旗日の丸の旗　倉橋惣三作詞　小松耕輔作曲
道ぶしん　倉橋惣三作詞　井上武士作曲
いうびんやさん　倉橋惣三作詞　弘田龍太郎作曲
渡し場の船頭さん　倉橋惣三作詞　中山晋平作曲
火消しのをぢさん　倉橋惣三作詞　小林つや江作曲

四六倍判
定價（送料共）
金七拾錢

日本幼稚園協會編（新刊）

幼稚園新唱歌

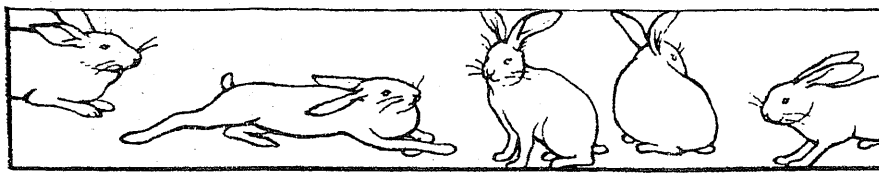
目次

めだか　山村きよ作詞　小松耕輔作曲
ほたる　青山綾子作詞　小松耕輔作曲
雨　杉山米子作詞　小松耕輔作曲
ふしん場　氏原錦作詞　小松耕輔作曲

四六倍判
定價（送料共）
金五拾錢

○この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌曲を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歡迎せらるることを期待してゐる。

日本幼稚園協會　東京・小石川・大塚町五三　東京高師附屬幼稚園内
振替東京一一七二六六



第三十九巻　幼兒の教育　第一號

目次

口絵
巻頭（實際に擔ふ者の力）……倉橋惣三（一）
幼稚園關係者諸氏へ……下村壽一（二）
幼兒の發達程度を檢せよ……堀七藏（三）
「新體幼稚園唱歌」の唱ひ方……小松耕輔（二）
事變下に於ける談話とその取扱……内山憲堂（一四）
朝鮮だより
　内鮮幼兒を保育して……麻柄トヨ（二四）
　朝鮮保育會の過去と現在……金聖愛（二六）
幼兒へのラヂオ……森本勉（二七）
子供の虚言―眞實への教育（一）……倉澤剛（三一）
殘花聚園……石川謙（三六）
偏食の話……藤本薫喜（三八）
子供の齒は母親の責任……湯淺泰仁（四五）
記念展覽會を開催して……青柳節子（四七）
保育用品研究會第一回狀況報告……みどり會幹事（五一）
ハイディ―ヨハンナ・スピリ原作……津田芳雄譯（五四）

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

觀察の實際

（新刊）

菊判一三〇頁
定價金壹圓
送料（東京市内 金六錢／其他 金九錢）

○觀察の實際については何か參考したいといふ御希望は皆樣から常に伺ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集（三版）

菊版三五〇頁
定價金壹圓五拾錢
送料（市内 金六拾五錢／地方・北海道・臺灣・樺太・朝鮮・滿洲 金拾五錢）

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

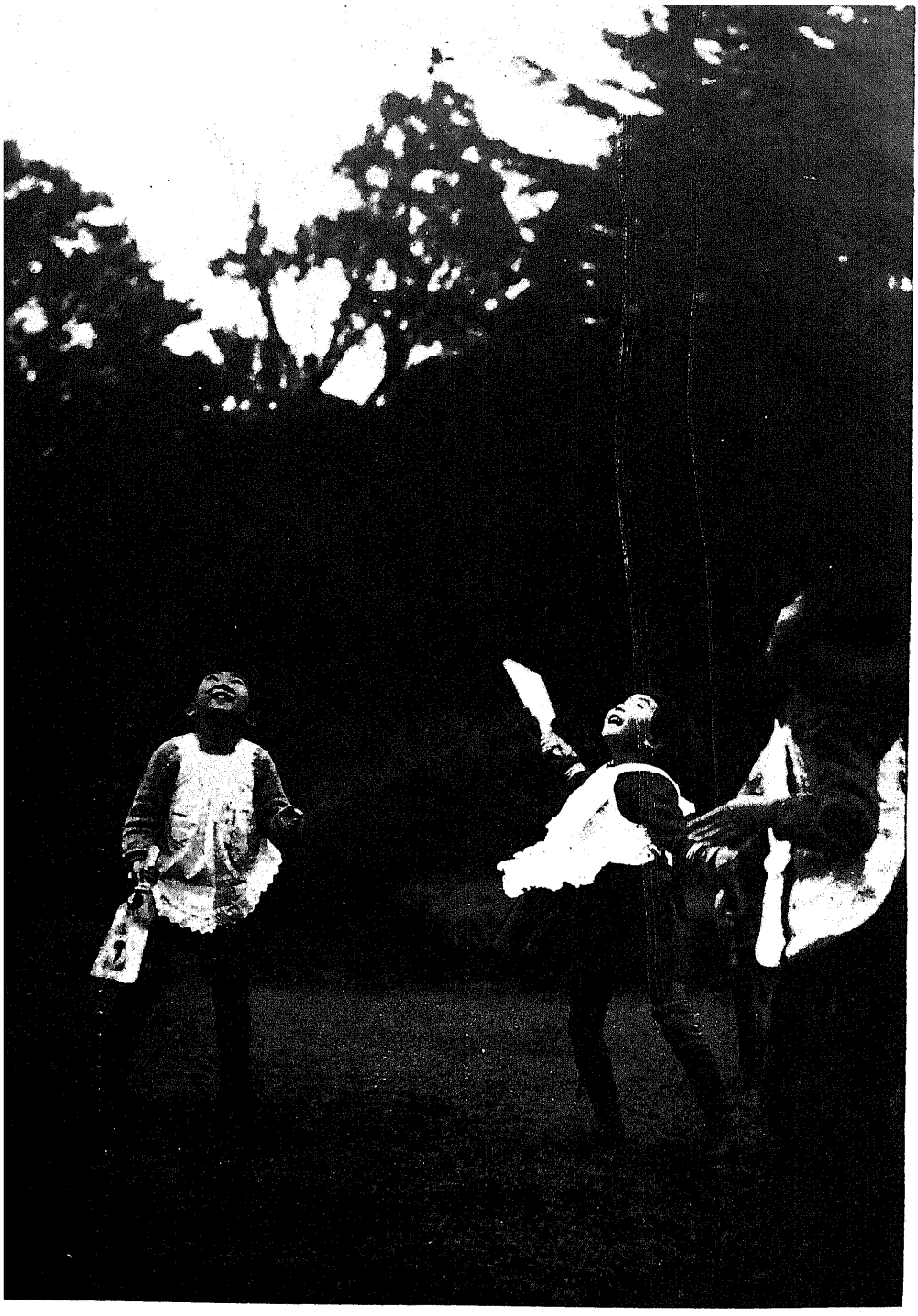
系統的保育案の實際（四版）

定價金壹圓
送料金六錢

幼兒の教育（月刊）

一ヶ月 金參拾五錢 送料金一錢
一ヶ年 金四圓貳拾錢 送料共

日本幼稚園協會
振替東京一七二六六
東京・東京高師附屬幼稚園
東京・小石川・大塚・三五



つけ受　つひ追
……つり遣　つち待

園稚幼屬附

幼兒の教育

昭和十四年一月

實際に擔ふ者の力

幼兒の保育に就て、その重要性の認識が、近來頓に加はつて來た。又、その研究も著しく進められて來た。社會問題、教育問題といふ部面的觀點から、國家問題としての大きい全面的觀方に於て、論議せられもし、促進せられもする聲が高くなつた。それが、此の時局に伴ふても一段と强調せられてゐる。

此際、論者と施設者と、或は又理論的研究者とに對して、その大切なる幼兒を實際に擔ふ者の力が最も切に要求せられる。それは母を助くる幼兒保育者の、專門家としての頭腦と熟練と、而して、實に自ら進んで國の幼兒を擔はんとする熱意とである。之れなくして、論議も空しい。

或る時は、此の熱意が社會の無關心の中に孤立した。又時には社會の無理解に抗立した。今日は……。尤より未だ充分多くを達し得てゐるとは言へないが、孤立、抗立に比する此の順勢の裡にあつて、その責任は倍加せられてゐると言はなければならない。

新らしい年と共に、新らしい力が、實際に擔ふ力を加へんことを。眞の生きた力は實際に擔ふ者にのみ盛り上る。

（倉橋惣三）

幼稚園關係者諸氏へ

會長　下村壽一

教育審議會は長い間愼重審議の結果、舊臘八日國民學校に關する要綱、師範學校に關する要綱及び幼稚園に關する要綱を決議して內閣總理大臣に答申することになつた。幼稚園に關する要綱は左の通りである。

一　幼稚園の設置に付一層奬勵を加ふると共に特別の必要ある場合は簡易なる幼稚園の施設をも認むること。

二　幼兒の保育に付ては特に其の保健竝に躾を重視し之が刷新を圖ること。

三　保姆に付ては其の養成機關の整備擴充に力むると共に其の待遇改善を圖ること。

四　幼稚園と家庭との關係を一層緊密ならしむると共に之に依り家庭教育の改善に裨益せしめ併せて幼稚園の社會教育的機能の發揮に力めしむること。

此の外、師範學校に關する要綱の中に、附屬幼稚園を女子師範學校の成素として必設のものたらしむることなどもあり、又委員總會に於ける特別委員長の說明に於ても、兒童就學前保育の重要性が可なり詳細に亙つて强調されたのである。元來幼稚園は創始以來六十年以上の歲月をも經過してゐるのに、教育の他の部門に比べると其の進步が遲々として、それが當然占むべき教育系統中に於ける重要性が、兎角輕視される嫌のあつたことは甚だ遺憾であつたが、此度國運未曾有の發展に伴ひ、教育の制度及び內容の全面的刷新改善を行ふべく設置された權威ある審議機關に於て、其の重要性が再認識せられ、國民の基礎教育の一環として、國民學校、師範學校と共に改善振興の根本方針を定められたことは、時勢の然らしむる所と言ひながら、幼稚園關係者諸氏が多年默々として、地味な比較的惠まれざる保育事業の爲に、營々として努力された結果が漸く酬ひられんとする機運に向つて來たのであつて、私は心から喜ばしく思ふのである。文部當局は勿論、右の決議を實行に移す爲に最善の力を致されることゝ信ずるけれども、之が實現には前途に猶相當の難關が橫つてゐることを豫想しなければならぬ。從來幼稚園關係者諸氏は、兎角教育制度の改革問題などには冷淡と言はぬまでも、動もすれば熱意を缺く憾みが無いでもなかつたが、今後は常に此の問題の推移に關心を拂ひ益々一致結束を固くし、適時文部當局を支援して、幼稚園事業の劃期的發展を實現する爲に應分の盡力を吝まれざることを切望する。

幼兒の發達程度を檢せよ

東京女高師附屬小學校主事　堀　七　藏

一

毎年十二月頃になると、幼兒教育の編輯子から原稿を强要せられる。それで小學校入學に關することを執筆するのかと尋ねると、左樣でもない。「何でもよい」といふことであるが、どうも入學に關することをも含んだ事柄を要求して居られるやうにも推測出來る。

兎に角十二月になると、翌年四月より學齡に達した子供をもてる親の多くは、そろ〳〵入學に關する心配をなすのが常であり、幼稚園の保姆の方も多くは小學校入學を懸念せられるやうである。これは誠に結構なことではあるが、多くの母親の心配でも、多くの保姆諸君の懸念でも、私の眼から見ると取越し苦勞であると思はれることが多い。

二

學齡兒童は、その居住する市町村立小學校に入學するのが本體であり、今日實際に於ても左樣である。しかし東京、大阪、京都などの大都市であると、市町村立小學校、卽ち公立小學校の外に、師範學校の附屬小學校の如き府縣立の小學校があり、また學習院、女子學習院、男女の高等師範學校附屬小學校の如き官立小學校がある。またいろ〳〵特色に富んだ私立小學校も少くないので、自然、小學校入學に際しても、いろ〳〵と選擇が行はれる實情である。殊に中等學校入學の際無試驗で入學出來るといふやうな小學校、或は中等學校入學步合の率が高い小學校といふやうな希望が多いために、子女の教育に一見識のある家庭では、競つて附屬小學校などの入學を希望せられる。從つて茲にも入學試驗地獄を現出するといふ一部の非難がある。「一體、子供は何もどこの小學校に入學せねばならぬと考へないでせう」といふと、「いえさうではありません。是非どこそこの學校でなくては入らないと申しますよ」といふ方が少くない。しかしそれは親や兄姉がそ

んなことを言ふから、當人も矢張り眞似をするだけのことにすぎない。それで子供が入學しない前から、「この學校がよい」とか、「この學校は中學校に連絡するからよい」とか、「女學校に無試驗で行けるからよい」とか、いろ〳〵な理由をつけて子供に學校の品等をつけさせることはどうかと思はれる。幸によい學校といふ小學校へ入學出來るとよいが、その學校に入學出來ないときには、所謂よくない小學校に入學させねばならぬことになる。すると小學校六ヶ年の間、即ち在學中常によくない小學校にゐることになつて、誠に面白くない。子供には、「自分の學校が一番よい學校」、「自分の先生が最もよい先生」といふ觀念を常にもたせることが最も大切なのに、その觀念を入學當初から失つてゐることになつて頗る教育的でない。

三

公立小學校では、義務としてその學區に居住する學齡兒童を入學させねばならぬから、入學前に當つて兒童の身體檢査をしたり、知能檢査をなすことがあつても、それは入學の許否を決定するためではない。これから始める小學校教育の參考となすための身體檢査であり、知能檢査である。身體檢査をして病氣があれば豫め治療をさせることが肝要であり、殊に傳染性の疾病があればそれ相當の手當を施させねばならぬ。入學後の四月、檢査をなすのは全校兒童に施すもので、規定によつて必ず施行せねばならぬ身體檢査である。

入學前に行ふ知能檢査は、その發達程度によつて學級などを編成するに必要である。さもなくとも第一學年の教育を始めるに當つて學級兒童の發達程度を知つてゐなければならぬ。小學校では入學兒童の發達程度やそれ〴〵の個性を十分知悉してそれに適應した教育を施すことが頗る肝要なるにもかゝはらず、兎に角兒童發達の程度に頓著せず、教科書にある教材を器械的に教授してゐる場合が多い。また一學級の兒童がそれ〴〵異なつた個性を有してゐることを無視して劃一的な教授をなすものが多い。殊に活動が旺盛で、暫らくもじつとしてゐることの出來ない兒童を無理に教室に靜座させるやうな教育法をとり、一時間中一日中兒童を叱り通すといふやうな教師が少くないのは頗る不適當といはねばならぬ。

四

附屬小學校などで入學者を決定するために行ふ身體檢査でも知能檢査でも、凡て滿六歲兒の發達標準によることは勿論である。入學檢定に於て、球投げをさせたにしても、それは滿六歲兒としてこの發達情況を檢するものである。球を投げ

させて兒童の態度や四肢の運動狀態を檢することが主眼である。先生が「この球を投げて見よ」と命ずると、「僕は投げない」と拒否する兒童があれば、その兒童は從順でないことが分る。「どうして投げないか」と教師が尋ねると、或る一男兒は「僕は地球のやうに大きな球なら投げるがそんな小さな球は投げない」といつて、どうしても投げないことがあつた。このやうな兒童は餘程考へ物である。この兒童には果して地球はどんなものか、分らう筈もなく唯附添つてゐる大人の言葉を鸚鵡返しに出鱈目の言を繰返したにすぎない。決してその兒童の發達が大いにすぐれて居り將來大人物になる素地があるなどと考へてはならぬ。

また檢定を受けんとする兒童に母親は、「先生が問はれたならばよく考へて返事をしなさいよ」と、幾度も〳〵も言ひきかせる人がある。しかし子供のことであるから、よく考へるのは普通でない。兒童は教師の問に應じて考へたことを反射的といふ位に返事をするのが普通である。尤も教師の問ふところをうはの空できき、或は不注意で全くきかないで、出鱈目の返事をするものが多い。故に「先生の問はれることをよくきいて返事をしなさい」と躾けることは肝要である。單に先生だけでなく、親でも兄弟でも、他人のいふところをよくきく態度は大に躾ける必要がある。しかしよく考へる態度を小學校一二學年の兒童に要求し之を躾けようとしても實は容易でない。曾つて入學檢定のとき、ぞの先生のところでも首を傾けて考へる風をなし、最後まで一度も返事せずして全部の檢定を通りすぎた兒童があつた。その檢定を終つた後、母親が「何と答へたの」といふと、「何も答へなかつたの」といふ。「どうして答へなかつたか」ときくと、「私考へてゐると先生は次へとおつしやるもの」とその兒童は泣出す。「どうしてそんなに長く考へてゐたの」と、母親がせき込んできつ問すると、「だつてお母さんがよく考へなさいといつたじやないか」と益々はげしく泣きむせぶといふわけ。勿論何も返事をしないから、この兒童は不合格となつたのであるまいが、その原因は專ら母親にある。母親があまり大事をとつて、兒童の本性に反することに氣付かず、「よく考へてよく考へて」と、八ヶましくその子供に要求したからである。

五

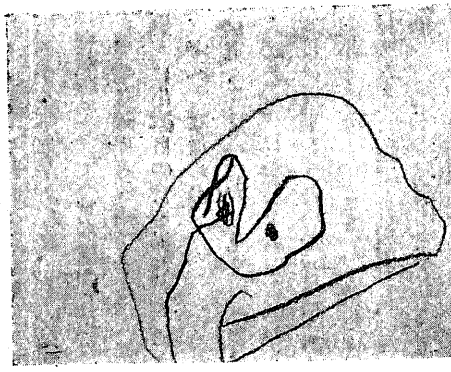
入學檢定の準備として、いろ〳〵のテストを練習させる場合が少くない。例へば、「林檎と蜜柑とどこが違ふか」といふことを觀念的に、「色が違ふでせう。」「皮がちがふでせう。」「中がちがふでせう。」よくおぼえておくのですよ。といふ工合に相異を三つなり四つなり記憶させるやうなテスト練習は面白くない。兒童に明白な觀念がなくとも、記憶してゐて答へ

るので、兒童の知能を檢するこゝにはならぬ。從つて檢定者の方ではそんな問題を出さないのが普通である。事物をよく觀察して比較する能力を檢するのを目的こなすのであるから、同じく林檎であり、蜜柑であつて、兒童が觀るこゝ必ず發見出來るやうな相異のあるものを觀察させるのである。兒童がよく觀察せねばならぬやうな問題である場合に、「林檎が出るこゝこういふこゝを答へなさい」こか、「蜜柑が出るこゝこういふ風に答へなさい」こ指示したり、大人の觀念を器械的に傳授させるやうな練習はまこゝによくない。それよりも兒童の眼前にある事物につき具體的に觀察させるやうに指導せねばならぬ。梅の枝こ椿の枝を觀させて、その觀たこゝろの相異を發表させるのはよいけれこも、「梅は落葉木でせう、椿は常綠木ですよ、よくおぼへて置きなさい」こいふやうな練習は却つてしない方がよいのである。

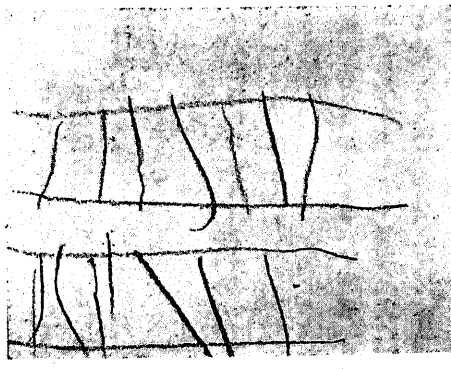
六

また入學檢定にこんな繪を描かせられるか、想像をしていろ〳〵練習させるこゝもよくない。「家が出るこゝこういふやうにかくのです」こか、「山が出るこゝこういふ風にかくのです」こ大人の觀念畫を兒童に强要するのはよくない。

第一圖

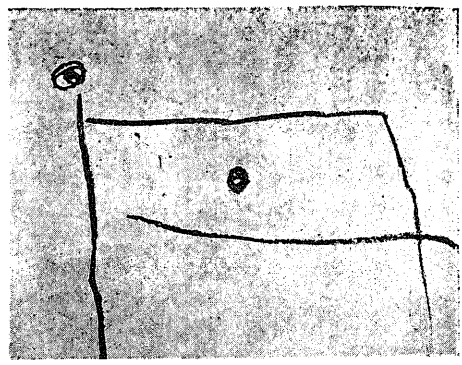


第二圖

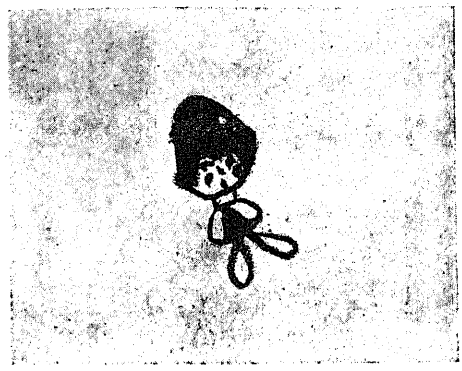


幼兒の畫を觀察するこ先づクレオンでも色鉛筆でも、無暗に紙に引ぱつて線をかく時代を經て、人間なりお馬なりをかく時代に入る。この時代の幼兒は人をかくこ顏こ手足があるだけで、胴がない。胴なごは幼兒にはどうでもよい時代である。顏をかくこ目玉こ口こあればよいので鼻や耳は問題でない。この時代の幼兒に對して、「そんな胴のない人間がゐるか、」「鼻のない顏

第三圖



第四圖



があるか」と八ヶましく注文することは適切でない。肩や臂のところは問題でなく、掌もなくてよい。唯指が五本出てゐると滿足してゐる時代である。勿論この時代の幼兒に實物を寫生させようとしても駄目である。先生の顏をかいてもお母さんの顏をかいても、一向にそれ〴〵の特徵が出ない。若し相異を表現するとなれば、頭髮とか着物とかの相異を以てする。眼や口を正面にかくが、鼻は横顏にかゝねばならぬ時代にあるのは小學校に入學する兒童である。

第一圖は幼稚園年少組の幼兒であるが、最も幼稚な方でクレオンを使つて塗つてあるが、一體何を書いてあるか、吾々大人には分らない。しかしこれを描いた幼兒には何を書いたか分つてゐるかも知れない。第二圖も第一圖と略〻同程度であるが、大人から見ると一レールとも想像出來るが、唯横と縱との線を組合せたにすぎないやうである。第三圖になると日の丸の旗を描く積りであることが明白である。金の玉、日の丸、旗竿、旗の地なぎが明白に表現せられてゐる。第四圖も第五圖も、また第六圖も幼稚園年長組の幼兒の繪であるが、それ〴〵描いた月日が異なり、描く目的が異なつてゐるやうである。第四圖では殆ど胴がない。それでも胸飾は忘れずにつけてある。手足の指なぎは勿論、表現してない。第五圖になると、顏が頗る特徵づけられてゐるが、胴から下は頗る粗末である。勿論鼻は正面から書けないので横に曲げた線で表現してゐる。第六圖では着物の模樣が目的になつてゐるから、胴が大きくなつてゐる。勿論、胴はどうでもよいので着物だけが意識せられてゐる。

第七圖から第十圖は先生を見える通りに書きなさいといふ寫生畫である。幼稚園の年長兒の繪のうまい者が寫生したものである。第七圖では靴のところは實際見ないで描いてゐるし、第八圖はわざわざ後手をして見せたところを描いてゐる。第七圖も第八圖も髪を分けて居り、耳を描いてゐるし、胸の邊は入念に觀察して表現してゐる。第九圖と第十圖とは共に耳は問題になつて居らぬが、第九圖は胴と脚との釣合などは全くなつてゐない。しかし第十圖は頗る實物に似てゐる。殊に靴のあたりにしても、手の工合でもポケットなども入念に寫生をしてゐる。第十圖の幼兒は、繪では小學校の三四年位である。

第五圖

第六圖

第七圖

第八圖

第九圖

第十圖

七

幼兒の數觀念の發達についても十分考慮せねばならぬ。「私の子供は百まで數へられます」と得意がる親があるが、只一二三と百まで數へても、果してその數觀念が發達してゐるとは限らぬ。九官鳥でも百まで眞似することが出來る。反對に「私の子供は二十までしか數へられぬ」と悲觀する親があるが、それは決して悲觀する必要がない。試みに四つのビスケットを出して「いくつあるか」と尋ねると、或る幼兒は、一つ二つ三つ四つと數へて「四つ」と答へる。また或る幼兒は、一、二、三、四と數へて四と答へる。更に或る幼兒は指で一々押へて數へるのでなく、眼で數へて四と答へるものもあるし、四つのビスケットを一見して四と答へる幼兒もある。四を一寸直觀して四と答へられる幼兒は四の數觀念がよく發達してゐる者である。同じ圓いビスケットを五つ横に一列に並べると、直に五と直觀するものがあり、縱一列の方が五と直觀し易いものもある。更に縱に三つと二つに並べて卽ち ⁝ にするのと、横に三つと二つとに並べて ∴ にするのと、或は ∴ と並べるのと、∴ と並べるのと、いろ〳〵並べ方によつて五の直觀が異なるものである。

また四のビスケットを出して「いくつか」と尋ね、更に三つ出して「皆でいくつか」と尋ねるといろ〳〵の程度がある。四に三で七と、直に答へる兒童もある。また四つを元にして五つ六つ七つと數へて七と答へる兒童もある。そのとき、目で數へるだけのものと、實物を一つ一つ押へて數へるもので發達程度が異なること勿論である。更に四を初めから數へ、それに三つを數へ足して七と答へる程度のものもある。この中には七と正しく數へることが出來なくて六といつたり、八

こいつたりするものもある。また一々數へないで、四こ三こ、實物を見て出鱈目に六こ答へたり八こ答へたりする兒童もある。小學校入學檢査の準備としては出鱈目に六つこいつたり八こいつたりするものよりも、一々數へても七こ正しく數へることこの出來る方がよい。勿論四を直觀し三を直觀し、直に七こ計算し得るに超したことはないが、小學校に入學する滿六歳の幼兒には大人の如く四こ三こで七こ、直に答へられるやうに數觀念の發達してゐる者は稀である。器械的に四に三足して七こ暗記さして置いた兒童には、四つのビスケットを出し、次に三つのビスケットを出して皆でいくらかこ尋ねるこ、答へられないのが普通である。

要するに入學檢査の準備としては、幼兒が正常に發達するやうに練習すべきもので、單に大人の觀念を器械的に記憶させるが如きことは愚の骨頂である。勿論檢定者が器械的な記憶力を檢することもあり、幼兒の判斷力を特に檢することもあるが、どこまでも幼兒の智能の發達程度を檢するもので、記憶的な知識を檢するのではない。

文部省母の講座

本年度の文部省主催の母の講座は一月二十三日から東京女子高等師範學校講堂に開催せられ、毎週月、水、金の三日づゝ、午後一時から四時まで講義がある筈です。講師は、東京女子高等師範學校長下村壽一氏、同教授倉橋惣三氏、同講師岡ハツノ氏、同講師佐々木林次郎氏の外、時局こ經濟、新生活建設、日支事變戰局、傷痍軍人保護、日本美術の話等夫々專門講師の講話があり、特別見學こして帝室博物館、愛育研究所等の參觀が講義こ併行して行はれる。聽講は母に限るが、東京女子高等師範學校母の講座掛へ申込まれゝば、どなたでも許可されるこいふことです。申込は早い方がよろしいが、一月二十二日まで受け附けられます。

各幼稚園のお母さま方へお勸めになつたらよろしいこ思ひます。

（編輯部）

「新體幼稚園唱歌」の歌ひ方

東京女子高等師範學校教授　小松耕輔

日本の旗　日の丸の旗

先般倉橋惣三先生の作詞によつて私が作曲した「日本の旗　日の丸の旗」について教授上必要と思はれるふしぶしを次に略記いたします。歌詞は次の通りであります。

日本の旗　　日の丸の旗
高く立てよ　　高く立てよ

朝日の色を　　赤く染めて
明るい空に　　ひら〳〵〳〵と
輝く光り　　日の丸の旗

日本の旗　　日の丸の旗
高く立てよ　　高く立てよ

以上の如くであります。

元來我が國に於ては、國旗掲揚の場合には「君が代」の國歌奏樂裡に竿頭に掲げるのでありますが、幼稚園等に於ては、もつとくだけた氣持で揚げたいと云ふ氣持は誰でも持つてゐることゝ思ひます。軍隊等に於ては莊嚴なる國歌奏樂の中に掲揚されるのは最もよろしいのであります。

此の歌詞を讀むと、その構成について誰でも氣づくことは、最初の二行、即ち「日本の旗、日の丸の歌。高く立てよ、高く立てよ。」の文句は最後にそのまゝ繰返されてをります。それ故この歌詞は長いやうに見えますが、實は五行の短い歌になつてをるのであります。

作曲の場合もこのことを考へて同じやうな節でくり返してをります。唯最後の節のくゝりをつけるために少しくかへてあります。即ち初めのところは

5 6 7 | 1 3 2 0 | 3 4 3 | 2 5 1 0 ‖
タカクタテヨ　タカクタテヨ

となつてをりますが、最後のくり返しの場合には

1̇ 1 6 | 5 6 5 0 | 5 6 5 | 3 2 1 0 ‖

となつて完全に曲が終つてをります。先づこの點を注意して幼兒に歌はしてほしいと思ひます。この同一の詞が、異つた節で作曲されてゐることを子供に十分會得さしていた

だきたいと思ひます。

子供は同じ詞が出ると、どうしても前の節で歌ひたがります。それ故方便としては最初の二行と最後の二行とを比較して子供に教へてしまふのも一方法でありませう。

それから全體の曲について申しますが、初めのニッポンノハタのニッポンといふところですが、ニッといふところの「ッ」を呑んでしまつて歌ふのであります。ニーポンとならぬやうにしたいと思ひます。

その次のヒノマルノハタのところは、

3.4 5 6 | 5 3 5 0
ヒノマルノハタ

でありますがひよつとすると次のやうになりたがりますから御注意ください。

3 3 5 6 | 5 3 5 0

それから八分休止符は時長だけ完全に休ましてください。次に樂譜の三段目の初めアサヒノイロヲのところですが、これは、

2.2 2 3 | 1 2 3 0 | 3 3 4 | 3 4 5 0
アサヒノイロヲ　アカクソメテ

こゝのアサヒのところが、次のやうになりたがりますから御注意ください。

2 2 3 3 | 1 2 3 0
かうなると、とても平凡になつてリズムがこはれます。音程と附點音符とに御注意願ひます。

すぐ次の

3 3 4 | 3 4 5 0
アカクソメテ

は、なんでもないやうに見えますが、音程がくづれます。ミーミファ、ミファソと半音が二度つゞいて出てくるので音程が狂いやすいのであります。此處は少しづゝ強くなつてまるります。

その次の二行が此の曲の中心であります。

1.1 1 6 | 5 6 5 1. 2 3 4 | 3 4 5 0
アカルイソラニヒラヒラヒラト

1.1 1 6 | 5 6 5 1. 2 3 4 | 3 2 1 0

此處は元氣に強く歌つてほしいと思ひます。この二行は初めは上行的な樂句で次は同じやうな節をくり返しますが、終りのところが下行的の樂句になつてをります。この對照をはつきりと子供に會得さしてください。それから息つぎの處が次の節に直ぐつゞきますから、一寸息をつぐや

うにして、息つぎの處の間がのびぬやうに注意してください。此處でも矢張り附點八分音符を十分時長を保つやうにしてください。この邊で旗が旗竿の七分目位のところへ達するやうにありたいと思ひます。

此處がすむと、再び最初の節が出てまゐりますから、落付いた氣持になつてゆつくりと歌ひ出してほしいと思ひます。そして最後のタカクタテヨ、タカクタテヨのところ、うつかりすると子供は最初の節になりたがります。此處を十分御注意願ひたいと思ひます。このおしまひで、ピタリと旗が竿上にひるがへるやうにしたいと思ひます。

歌詞はあまり歌謠調子にならぬやうに、むしろ言葉のまで朗讀的に歌はれることを希望いたします。

○

暮の二三日を輕い風邪氣味で寢てゐながら、ふと思つたことでした。

いろ〳〵のところで、いろ〳〵の子どもが、いろ〳〵な年を迎へるであらうと。そのなかで、溫く、明るく、樂しい方の子どものことよりも、冷く、暗く、樂しくもあるまいと思はれる子ども達の方が、次から次へと、想像の目の前に見えて來るのでした。

病院の白い壁、白いベット。そこにほそ〳〵と、蒼白い顏に眠つてゐる子ども。その目には長いまつげが見え、その額には青い血管が浮いてゐる。いま、附添ひのお母さんは、一寸、どこへか行つたか……私は寢がへり打つた。

きたない長屋の一室。なんといふガランとした室か。さむ〳〵と障子の破れ紙が風に動いてゐる。黑い瀨戸物のこわれ火鉢には火がない。それどころか灰も底に沈んで固まつてゐる。そのそばに、寢てゐる母親。その傍に泣いてゐる子ども。父親はどこへ行つてゐるのか……私は寢がへりを打つた。

そこは、どこか私の未だ知らない土地である。あたりは騷しい人聲に何を言ひ爭つてゐるのか。人々は皆怖れと飢えとに身をふるわせてゐる。その横の方のごみの山の傍に二人程子どもがゐる。遊んでゐるといつていゝのか、唯しやがんでゐるといつていゝのか。兎に角く、動く元氣も、笑ふ元氣もない子ども達である。そこへ、通りかゝつた日本の兵隊が、急がしい足を一寸止めて、軍服のポケットから何か出して、その子等に與へた。その子等は默つて、それを貰つて、それでも、一寸頭を下げて何か言つてゐるらしい。が、それは支那の言葉で、私には分らない。……

私は、また寢がへりをうつた。

（S・K）

事變下に於ける談話とその取扱

聖美幼稚園　内山憲堂

一　生きてゐる談話

聖戰下第二年目の新年を迎へた。南京、廣東、漢口、續いて陷落し誠によろこばしい限りである。けれども、蔣介石は抗戰を持續してゐる、更に經濟戰を思想戰に特に新支那建設に、戰はこれからである。

この重大時局下にあつて、吾々保育者はその幼兒教育の上に如何なる方法を講じなければならないか、保育項目を如何に國策に副はしめるかと云ふことを考へなければならない。

與へられた題目が「事變下に於ける談話」であるから談話を中心にして檢討を進めて見ることにする。

本論に入る前に「談話」そのものについて、今日迄一般保育の持つてゐた考へを是正して置きたい。

談話を童話であると考へてゐる人があるがこれは古い考へ方であつて、談話卽童話ではない。次に談話と童話とは全く別個のものであると考へるのは新しすぎて脫線した考へ方であつて、談話と童話とは決して別個のものではない。

談話を便宜上分類して見るなれば

- 1、話し方
  - イ、童話
  - ロ、自由發表
  - 幼兒が話す場合
- 2、聽き方
  - イ、童話
  - ロ、自由談話
  - 保姆が話す場合

自由發表とは、童話以外、幼兒が、見たこと聞いたことを自由な形式で發表することである。自由談話とは保姆と幼兒とが自由に問答をして語り合ふ場合を言ふのである。このすべてのものを包含したものを談話と云ふ。そして談話は常に今日の幼兒の世界に動きかけ、幼兒のその日その日の生活に觸れてゐなければならない。

月に一回又は週に一回時間を決めていやいやながらお義理的に形式的に話す童話それのどこに生命があるだらうか。幼兒と共にあり卽發卽應、常に幼兒の心に反響して行く童話、日々の新しい事項を中心にした自由談話、幼兒の

その日〳〵の自由發表から進展した談話―そこに生命の躍動がある。談話を幼兒の生活の圏内に持つて、談話を生かせ―、そこに談話の新使命と眞目的とがあるのである。

二　幼兒は事變をどう見てゐるか

談話は幼兒の生活であると云つたが、然らば、幼兒は彼等の生活を通じて今度の事變をどう考へてゐるかと云ふことを知らなければ、談話を幼兒に與へることが出來ない。

私は常にこの問題に對しては關心を持ち、十三年の秋「事變を子供にどう話すか」と云ふ小册子を出版したが、子供の考が事變發生當初から變つて行つてゐるかどうか。幼兒が事變を如何に見てゐるかと云ふことを十二年の十一月末の調査と十三年の十一月末の調査とを擧げて比較して、御參考に供したいと思ふ。

一、どこの國と戰爭してゐるのですか。

年度	十二年度						十三年度					
項＼幼兒	赤組		白組		計	%	赤組		白組		計	%
	男	女	男	女			男	女	男	女		
支那	六	二	一四	一三	三五	七四・五	九	六	一一	一〇	三六	六六・七
しらない		二	一	三	六	一二・八	三	三	四	五	一五	二七・八
滿洲	一	一	一	一	四	八・五	一	一	一		三	五・五
ロシヤ			一		一	二・一						
ドイツ	一				一	二・一						
計	八	五	一七	一七	四七	一〇〇	一三	一〇	一六	一五	五四	一〇〇

二、どうして戰爭をしてゐますか。

年度	幼兒	赤組 男	赤組 女	白組 男	白組 女	計	%
十二年度	支那が惡いから	一		一〇	七	一八	三八・三
	知らない	七	三	三	四	一七	三六・二
	支那がせめてくるから			四	二	六	一二・八
	支那が子供を殺すから		一		二	三	六・四
	支那が仲よくしないから				一	一	二・一
	日本が偉くなつたから		一			一	二・一
	どうしても						
	ドイツとイタリアと仲よくするまで						
	支那が打つてくるから						
	お國のためだから						
	其他						
	計	八	五	一七	一七	四七	一〇〇

年度	幼兒	赤組 男	赤組 女	白組 男	白組 女	計	%
十三年度	支那が惡いから	一	一	五	四	一一	二〇・四
	知らない	八	六	四	五	二三	四二・六
	支那がせめてくるから			二	一	三	五・五
	支那が子供を殺すから	一			一	二	三・七
	支那が仲よくしないから	一	一	一	一	四	七・四
	日本が偉くなつたから						
	どうしても	二	一		一	四	七・四
	ドイツとイタリアと仲よくするまで				一	一	一・九
	支那が打つてくるから			二		二	三・七
	お國のためだから					一	一・九
	其他			二	一	三	五・五
	計	一三	一〇	一六	一五	五四	一〇〇

三、どうして日本は強いのでせう

年	十二年度					十三年度				
幼児	赤組		白組		計	赤組		白組		計
項	男	女	男	女		男	女	男	女	
知らない	五	三	三	五	一六	八	五	五	一〇	二八
一生懸命やるから			一	四	五					
力があるから			一	一	二	一		六	一	八
大和魂があるから			四		四			一		一
天皇陛下がいらつしやるから				一	一			一	一	二
澤山ゐるから			三	一	四		一			一
規律が正しいから	一		一	二	四					
日本だから	一	一	一		三		一		一	二
忠義をつくすから				一	一					
支那が弱いから	一		一		二	一			一	二
其他		一	三	一	五	三	三	三	一	一〇
計	八	五	一七	一七	四七	一三	一〇	一六	一五	五四
%					一〇〇					一〇〇
					三・五	八	五	五	一〇	二八
					一〇・六					五一・九
					四・三					一四・八
					八・五					一・九
					二・〇					三・七
					八・五					一・九
					八・五					三・七
					六・四					三・七
					二・一					
					四・三					三・七
					一〇・六					一九・〇
					一〇〇					一〇〇

四、もしもあなたのお父さんが戦争に行つたらどうしますか。

年	幼兒	赤組 男	赤組 女	白組 男	白組 女	計	%
十二年度	待つてゐる	一	二	六	四	一三	二七・七
	解らない	三	二		四	九	一九・〇
	行かないからいゝ	二		二	二	六	一二・八
	手紙を出す			一	一	二	四・三
	留守番をする						
	田舍へ行く	一		二	一	四	八・五
	行くとこまで行く			六	一	七	一四・九
	幼稚園へ休まず來る						
	母さんのお手傳ひをする		一			二	四・三
	友達と遊ぶ			一		一	二・一
	お宮へ行つて死なない樣におがむ						
	其他	一			二	三	六・四
	計	八	五	一七	一七	四七	一〇〇

年	幼兒	赤組 白	赤組 男	赤組 女	計	%
十三年度	待つてゐる	一	一	二	五	九・三
	解らない	五	二	二	一四	二五・九
	行かないからいゝ	二		一	三	五・五
	手紙を出す		五	一	六	一一・〇
	留守番をする	一		一	二	三・七
	田舍へ行く					
	行くとこまで行く					
	幼稚園へ休まず來る			一	二	三・七
	母さんのお手傳ひをする			二	三	五・五
	友達と遊ぶ				三	五・五
	お宮へ行つて死なない樣におがむ			一	一	一・九
	其他	二	八	四	一五	二七・八
	計	一三	一〇	一六	一五	五四	一〇〇

五、非常時には皆さんはどうしたらいゝでせう。

年	十二年度						十三年度					
幼児	赤組		白組		計		赤組		白組		計	
項	男	女	男	女		%	男	女	男	女		%
解らない	五	四	五	六	二〇	四二・五	一〇	六	七	四	二七	五〇・〇
お金を使はない							一	二	四	六	一三	二四・二
お母さんの言ふことをきく			四	六	一〇	二一・三						
獻金をする			四	二	六	一二・八			二	一	三	五・五
慰問袋を作つてあげる			一	一	二	四・三				一	一	一・九
貯金をする										二	二	三・七
大きくなつて働く			一	一	二	四・三						
田舍へ行く	一				一	二・一		一			一	一・九
お利口にしてゐる							一		一	一	三	五・五
鐵鉋で打つてやる	一				一	二・一						
行儀よくする									一		一	一・九
其他	一	一	二	一	五	一〇・六	一	一	一		三	五・五
計	八	五	一七	一七	四七	一〇〇	一三	一〇	一六	一五	五四	一〇〇

右の表について、その大體を見るなれば、支那と戰爭をしてゐると云ふことに對しては認識を持つて來てゐて、本年はさすが、ドイツやロシヤと戰爭をしてゐると云ふのはなくなつてゐる、滿洲と戰爭してゐると云ふのは滿洲國へ兵隊が出ることゝ、露滿國境問題から來た影響と見られる。

第二問に於て、「支那がせめてくるから」なぞが減り、「支那が仲よくしないから」が增加して來てゐるのは時局に對しての認識が次第に正確になつて來てゐることを示すものではなからうか。

第三問に於て「一生懸命にやるから」がなくなつて、「力があるから」が增加してゐるのも面白い現象である。

第四問では「行かないからいゝ」と云ふのが減つて「手紙を出す」の增加してゐること。「行くところまで行く」と云ふのがなくなつて「幼稚園へ休まず來る」が出て來たのも當を得た答となつて來てゐる。

第五問に「お金を使はない」と云ふのが十三年度のみ二三人出てゐるのは、消費節約、資源愛護が本年春頃から强調せられた影響と見ることも出來る。

一言斷つて置かなければならないことは、十二年度より、十三年度に於て「知らない」のが多くなつてゐるのは赤組（年少組）が十三年に多くなつてゐることによる。

三　時局の正しい認識

統計で見ても解る通り幼兒は常に、環境の影響を受けて、自分の小さい認識を作つて行く、それは非常に刹那的ではあり、しかも無批評、無條件で盲信的である。故に幼兒に徒らに殺伐な話や、單に敵愾心を唆るだけの末梢的な部分的な話によつて幼兒の頭を刺戟することは、避けなければならない。

先づ第一に彼等に與へなければならないことは、時局に對する正しき認識である。日本が何故に支那と戰つてゐるか、支那の間違つた大將、蔣介石が日本と仲よくしないためである。――支那のよい人たちは仲よくして日本の兄弟分として助けてやらなければならないと云ふことを明らかに與へなければならない。幼兒たちは第二の國民で今後四十年五十年後の日本を背負つて立つ者であるから、徒らに成人の小乘的感情のみによつて單なる痲醉的刺戟を與へないやう、四十年五十年後の日本の立場を考へ、高所、大局に立つて、子供をして東洋の盟主なり世界的の日本國民たる時世に處する大きな教育をしなければならない。

四　事變話材の取り扱ひ

事變に於ける皇軍の活躍は空に陸に水に實に目覺ましいものがある。毎日の新聞記事、ラヂオニュース、報告講演

に必ず一つや二つは子供に話してやる話の材料となるやうなものを見出すのである。

戰爭程、人間を緊張させ、氣持ちを眞劍にさせ、人間本來のありのまゝの姿を見せ、更に人間以上の力を示すことはない。故に戰線に於ける美談、感激談は數限りなく生れて來る。これ等の話の中幼兒に理解出來、興味を持ち得るものは適當に之を與へなければならない、これがやがては愛國心となり日本精神養成の一端ともなるものである。

但しこの際注意しなければならないことの二三を擧げて見ると、

1、殺伐な話は避けること

「敵の首を切り落した」とか「ブスリと芋ざしにした」とか云つた樣な刺戟が强すぎる話は改作して與へなければならない。

2、感傷的な話はいけない

戰爭は生命のやり取りであるから、反面から考へると感傷的になりやすいものである、センチメンタルな話は絕對に話してはいけない。

3、部分的武勇談に捉はれないこと

如何に戰爭とは言ひながら、特に立派な働きをする人は平素に於て、相當の覺悟を持つてゐる人である。故に單に戰場に於ける武勇談のみの描寫に止まらず、その立派な働きをした人の平素の心掛け、ここに幼少年時代の立派な行ひなぎを附加して話して行くことによつて、人格に觸れて行くことにもなるし、話として有機的關係や變化を作る上にも必要なことである。

4、支那を馬鹿にした言葉を用ひないこと

「チャンころ」とか「チャンチャン坊主」とか云ふ侮蔑した言葉を用ひてはならない。幼兒の「からかひ」は兒童心理學的に見ても一種の自己保存の本能と遊戲本能との現れとも見ることの出來る全く生理的のものである。よろこぶからと云つて、かゝる言葉を用ひることは將來、日支親善の上に支障ともなるものである。

五　正確な知識

幼兒は意識的無意識的に彼等の周圍から、言葉だけを知るものである。可成り難かしいことでも聞きかぢつて來る。ツェッペリンが來ればツェッペリンを、戰爭が始まればトーチカ、クリークを、コンドル機が來ればコンドルを……全く驚く程聞いて來る。しかしそれの眞意は知らない、或は自分勝手な解釋をしてゐる。

防空演習の時に、「空襲」と云ふことを幼兒たちは思ひ思ひに解釋してゐたことがあつた。

憲ちやん

「僕ここ、昨夜空襲したよ」
「空襲つて、どんなことですか」
「空襲つて、電氣を消すことさ」
この子は電氣を消すことを空襲と考へてゐる。
大谷さん
最近暇をとつた傭人が青年學校の正服で防空演習の夜、通りかゞりに大谷さんの家へ一寸寄つたのを、
「僕ここにゐたケンどん（元の使用人の名）昨夜空襲でやつて來たよ」
この子は防護團や青年學校のカーキ色の服を「空襲」と云つてゐる。
小島さん
「僕、昨夜、乘合バスで歸つたら自動車も空襲してゐたよ」
この子は黑布で覆ふことを空襲と解してゐる。
幼兒の言葉に對して正しき解釋をして正確な知識を與へてやらなければならない。
それには、保姆諸姉が常に、時代に後れない樣に、新しく正確な知識を持つてゐると云ふことが必要である。クリーク、カタパルト、トーチカ、タンク、租界、手榴彈（テリウダン）等新しい言葉は次から次へと出て來る、そして是等の言葉は皆幼兒が關心を持つ言葉ばかりである。

六　特に望ましいこと

事局に當つて談話として特に與へていたゞきたいことの二三を擧げて見ると次の樣なものである。

1、日本精神涵養の資となるもの
外來の物質文明萬能時代は過ぎた。これからは日本精神を强調して行かなければならない時である、我民族の持つてゐる精華を現はして行かなければならない時である。
忠君愛國
武士道的精神
責任感
部下を愛すること
罪を憎んで人を憎まないこと
等に關する、いろいろな話。

2、物資愛護、消費節約に關するもの
幼兒たちは「非常時だから、もつたいない…」と云ふことをよく言ふが、家庭での誰かの言葉を聞いてゐるのである。幼稚園でも話してやればよく了解するのである。これに關した美談など面白く話してやることも結構なことである。

3、國民說話（民族童話）を與へること
日本十大噺、口碑傳說等を出來るだけ多く與へる樣に

して貰ひたい。「桃太郎」は日本人の血を通してゞんなに日本精神を養つて來たことだらう、「かちかち山」にしても「猿蟹」にしても日本人の正義感を傳へて來てゐるものである。

近頃家庭でも幼稚園でも民族童話を與へることが少くなつた樣である。童話に紙芝居に人形芝居に、大に與へたいものである。

注意することは小學校國語讀本の內容に準據することで、これと違つた話をして、それが先入主となつてゐることを小學校へ行つて子供の頭を混亂させることになる。

4、年中行事を盛大にやること

年中行事も民族の中から生れた一つの祭りであつて、節分、雛まつり、花まつり、お節句、七夕まつり、菊まつり、お月見、餅つき、それぞれ面白い說話を伴つてゐるものであるから、行事を催すと共に、行事についての傳說なり、行事に因んだ話を聞かせてやると云ふことを忘れてはならない。

七　終りに

心ある保育者、眞に幼兒のことを考へる保育者は、一時の流行や、目先きのことや、大人中心のことによつて幼兒の前途を誤つてはならない。時勢に迎合して形式的な、見得を衒つた保育をしてはならない。

國家が、今日の幼兒に何を求めてゐるか。今日の非常時を切り拔けて次に來るものは何か、長期建設の後を引き受ける第二國民として必要なる立派な身體と精神を彼等に、しつかりと植えつけて置かなければならない。

談話は、特にその精神を作り上げる上に於て重要な役目をするものである。今日迄の傾向は談話と觀察は保育項目中に於ても一番顧りみられなかつたものであつた、しかし日本精神を養ひ、民族意識を傳へる上に談話はなくてはならないものになつた。今後愈〻談話の研究、發達を希望して止まない次第である。

しかして、談話によつて與へるものは、常に幼兒の生活の圈內にあるものであり、幼兒の心の糧となるものであり、特に、次の時代を背負つて立つ大國民として、東洋の盟主として、立派な日本人として血となり肉となる內容を持つものを選んで貰ひたい、かくして談話に生命を與へよ。談話を生かせ。そして保育を生かし、子供を生かせ。

内鮮幼兒を保育して

愛國婦人會朝鮮本部幼稚園
麻柄　ヨト

一、本園は大正十一年四月、時の政務總監水野練太郎閣下夫人水野滿壽子女史が内鮮幼兒を共同保育して、一視同仁の有難い聖旨を體し双葉の時から内鮮一體の精神を培ひ養ふと共に、その母の會を通じ内鮮家庭の融和に資することを目的として創立せられたものであります。

一、園長は代々の政務總監夫人（愛國婦人會朝鮮本部長）で副園長は六名（愛國婦人會朝鮮本部副長四名（内地人）二名（鮮人））で幼稚園の行事にはかはる〳〵御臨席になります。保姆は主任保姆の外三名は内地人で二名は鮮人であります。内鮮幼兒數は現在二百三十四名で、内兒（内地人幼兒の略、以下同斷）は三分の二、鮮兒（鮮人幼兒の略以下同斷）は三分の一といふ割合で收容して居ります。

一、組の編成は

年長
- 緑＝内鮮人組（外人一名を含む）
- 紫＝内鮮人組
- 青＝鮮人組

年少
- 黄＝内鮮人組
- 赤＝鮮人組

の五組であります

一、本園開設當時の主任保姆は鈴木はる先生で園の内外共に一方ならぬ御苦心であつたことを偲ばれます。鈴木先生は御病氣のため前後八年にして辭され、私が其の後任となり今日に至りましたが、何分言語風俗習慣を異にするために内地人のみの幼稚園、鮮人のみの幼稚園とは違ひ言ひ知れぬ苦心があり努力がいります。幸に時代の推移に伴ひ園兒の保護者も内鮮一體の理解ある者が多くなり、特に鮮兒の母姉は非常に教育熱に燃え、服裝等も内地と同じく洋服にし（一見内鮮の別なし）常に國語の使用は勿論、中には生花、茶の湯等の研究をなし、年中行事等には進んで出席して本園の事業を援助せらるることは、内地人母姉以上で感謝、感激することが多くなつて參りました。

一、母の會を利用して常に講演會や研究會（洗濯、料理、洋裁等）を開催して内鮮母姉の親睦融和に努めて居ります。

一、言語は發音、或はアクセントが六ケ敷しくて、中には

おはようございます　を　おあようございます

さようなら　を　さをうなら

おひる　を　おいる

一つ二つ三つ　を　一す二す三す四す

といふやうな鮮兒もありまして、それが内兒にも知らず〳〵の間に語弊を來さんかと間斷なき注意を拂つて居ります。

一、卒園兒は毎年二十有餘の小學校に分れて入學します。從來鮮兒の入學する學校は普通學校と言ひましたが、本年四月から學制の改正により普通學校も小學校と稱し、國語を專用することゝなりました。爲に特に言語に注意をして會話等に習熟せしむる樣に出來るだけ國語使用につとめて居ります。鮮兒を收容する公立小學校が不足で、卒園兒の鮮兒全部は身體檢査、家庭の狀況、メンタルテスト等

により詮衡の上入學許可せらるゝ制度になつてゐるため是又相當人知れぬ苦心を要します。

一、新入園の當時目につくこと

イ、ハンカチで洟汁を拭く兒

ロ、便所で手を洗はない兒

ハ、飼養してある動植物の愛護心に乏しく稍〻粗暴で惡いたづらをなす兒

ニ、自分で出來ることでも附添人(下女、祖母等)に一切してもらふ兒

(例へば靴、オーバ、バスケット、帽子其他の携帶品等の始末)

ホ、水道の栓に口をつけて水を飲む兒

ヘ、お辨當を食べる時最初から御飯にお湯をかけてサジ、ホークを使用して食べる兒

ト、登園して間もなく大便にいく兒

チ、坐する時に男はあぐら、女は片膝を立てる兒

リ、人形を粗末にする兒

ヌ、附添人(下女)(下男)で園庭のどこにでも痰を吐く者、又暑氣になると園庭の木陰等に平氣で睡眠をしてゐる者、又通園の途中園兒をつれながら買食をする者もあります。

以上は內鮮兒に於て目につくことであります。それが他の園兒に感化せぬかを恐れ細大となく矯正指導に努めてゐます。從つて最近は漸次その效果著しきものがありまして喜んで居ります。

一、花一匁、狐さん、南瓜遊び、鬼ごつこ、何つき、瓢簞鬼、かくれんぼ、泡ぶくたつた等每日の自由遊びには內鮮保姆が中心となつて內鮮園兒が共に愉快に遊びますので、何時の間にか言語その他の感化を受ける事が多いのであります。其他砂場遊び、ブランコ、まゝごと、兵隊遊び等隨所で自發的に內鮮園兒が仲よく遊んでゐます。一學期の間はなか〳〵內鮮兒一緒に遊ぶ樣な事が少ないのでありますが最近では白(ハク)さん、尹(イン)さん、羅(ラ)さん英子(ヒデ)さん(郭英子)玉(タマ)ちやん(鄭玉姬)などとお互に名前をおぼえて自由に嬉々として遊ぶ樣になりました。

一、遊戯の時は遊戯室になるべく內鮮二組を兩側に腰掛けさせ、各一組づゝ或は內鮮男女別に唱歌遊戯をさせます。又兩方一緒に二人或は一人づゝ內鮮交互にスキップをさせたり、その他色々の方法により絕えず近づけて居ります。

一、國體觀念養成として　天皇陛下の御稜威に輝く日本の有難いことや、每月一日を國旗揭揚日として國旗に對する禮儀や又四大節には學校に準じてそれ〴〵式を擧げて皇室の尊嚴を知らせて居ります。

一、時局に處しては幼兒ながらも正しく認識させて吾々內鮮人共に日本人である幸福を感謝させることにつとめ常に朝鮮神宮、京城神社、乃木神社、八幡宮、天滿宮等に參拜して皇軍の武運長久をお祈りし又無言の勇士の英靈を默禱して歸ります。白衣の勇士慰問には園兒達の製作品を持つて代表園兒二十數名の可愛いゝ遊戯やお話などの出演をしお慰めしてゐます。本年の運動會には白衣の勇士六十名を招待して母の會幹事が接待にあたりました、勇士の方々が園兒と共に競技や日の丸行進曲等の遊戯をなされ心からの慰安が出來たことを內鮮保護者、園兒達一同と共に喜びました。

一、資源愛護のため特に物を粗末にせぬ樣注意をなし廢品でも再生活用出來ること

を理解させて銀紙、サイダー、ビールの口金、空鑵等を持參させて幼稚園で整理の上國防獻金を致させて居ります。

一、鮮兒は內兒よりも比較的明朗で年々の統計上出席率は高くて元氣でありますが內兒は寒暑の度により或は天候により缺席者が多いので內兒には常に克己忍苦する樣特に注意をして居ります。

一、以上の如く言語風俗習慣等を異にする內鮮幼兒の保育には先づ吾々內鮮保姆六人が一體となつて國體觀念の强い信念のもとにその環境を整理して、誠心、誠意和氣の中に園兒を誘導保育いたしませうと先づ一同實踐躬行に努めてゐる次第でございます。

朝鮮保育界の過去と現在

京城保育學校
金聖愛

保育史上より眺めて、歐米各國及び日本內地に於ては、凡ゆる文明と共に、保育機關の隆盛なる施設及びその理論と實際との發達は、實に燦爛たるものであると存じます。此處で私は朝鮮では、如何なる徑路を以て、幼稚園敎育が始まり、今までに如何なる發展を遂げてゐるかを簡單に述べて見やうと存じます。

朝鮮では最初に創設された幼稚園は、京城南山町にある京城公立幼稚園であります。此の幼稚園は今より三十八年前卽ち明治三十三年五月に創立されたものでございます。其次は、京城仁寺町にある、私立京城幼稚園で今より二十六年前大正二年四月に創設せられ、その翌年二十五年前大正三年一月に京城梨花幼稚園が、それより又二年後二十三年前大正五年四月に京城中央幼稚園が創立せられました。

それより後を追つて、東西南北に數多い幼稚園が設立されるやうになつて參りました。

こゝでもう一つ考へるべき事は保育學校の創設でございます。勿論私共が旣によく知つてゐる事ではございますが、保育學校は幼稚園の母の機關、卽ち指導機關であるだけに、保育學校の事を忘れてはならないと存じます。

保育學校として、最初に設立されたものは、京城淸進町にある京城保育學校で今より十二年前昭和二年八月に創立され、その翌年に京城梨花保育學校及び京城中央保育學校が繼續して、創立されました。このやうに幼稚園が創設されて以來三十八年、保育學校が創立されて十餘年間の保育運動は日に〳〵隆盛となり、現在に至つては、京城保育學校の今までの調査結果に依れば、

全朝鮮保育學校數	三
全朝鮮幼稚園數	約五百
全朝鮮現在園兒數	約二萬五千
全朝鮮保育學校出身	千五百
全朝鮮現在保育學校生徒數	五百

（三五頁へ）

幼兒へのラヂオ

——「幼兒の時間」について——

日本放送協會教養部　森本　勉

いろ〳〵の意味で多くのハンディキャップと、重い負擔を懸けられてゐる現在の日本の子供たち殊に——幼兒をどう取扱ふべきかは、日本文化の——そして日本國家の重要な問題の一つである。近來、國家が、社會が段々とこの問題を取上げて、夫れ〳〵の立場から、幼兒の哺育、養護等に關し各種の施設を講じつゝあるのは大いに喜ばしいことである。その中でも我がラヂオがその瞬速性と廣汎性とを利用して、その對象の分野の重要なものとして、幼兒(子供)を取上げてゐることは、高く評價されていゝと思ふ。

現在のわが放送部門に於て、直接、幼兒を對象としてゐる放送種目は、夕方の所謂「子供の時間」と、學校放送に於ける「幼兒の時間」とである。唯前の「子供の時間」は、その狙つてゐる範圍下は幼稚園程度の幼兒から上は小學校、更に中等學校の二三年、時にはそれ以上にも及ぶ廣汎な兒童層であり、自然、純粹(?)の幼兒への放送割當ては少く、又は範圍が明瞭を缺く場合も少くないので、こゝでは正面から「幼兒の時間」と銘打つてある學校放送部門の「幼兒の時間」だけを取扱ふことにする。

學校放送「幼兒の時間」といふ名は、所謂學校と幼稚園とを區別してゐる今の教育制度からは、些か當を得てゐないが、「幼兒の時間」誕生の始めから便宜的に用ひられ、今日に及んでゐる。然し勿論、學校放送「小學生の時間」とは編成方針も異つて居り、利用せられる聽取側としても區別して考へられてゐるのである。

然らば「幼兒の時間」は何を意圖し何を狙つてゐるか。單的にいへば家庭や幼稚園の保育の御手傳ひであると云へよう。但し少くとも、保育、訓育は、人格と人格の直接的交渉によつて、始めて最高度に目的を達し得るといふ建て前からいへば、ラヂオは甚だ不完全な保育の手傳ひしか出來ないのである。聲と音とこの傳達機關に過ぎないラヂオは、

所詮教師や保姆に取つて代り得るものでなく、利用者である教師や保姆の、よき協力者として始めてその役目を果し得るのである。そしてそこに教具としてのラヂオ本來の意義があるのである。百聞一見に如かずと云はれた、その視覺作用を全然封じられて、聽覺のみに頼らねばならぬ不具の世界、然し、盲人が通常人以上の聽察力を持つ意味に於て、このラヂオは、音と聲との世界に於ては、他の企て及ばない機能を有つてゐる。それこそ採つて用ふべき部面である。要するにわが「幼兒の時間」の目的も範圍も、一に懸つて幼兒保育の理念と、ラヂオの機械的特性との交錯點にあるのである。

以上を具體的な問題に結びつけて考へる時、「幼兒の時間」放送の內容も形式も、第一にある規制を受けなければならない。たとへばラヂオでは視覺が利かないから、たとへ幼稚園令に園兒指導總目として、遊戲とか唱歌、觀察、談話、手技數を擧げてあつても、視覺の助けによる作業、例へば遊戲とか手技などはまづ「幼兒の時間」から除外されなければならない。ラヂオでの指導もやればやり得ないことはないが、困難のわりに效果的でないからである。又、最もラヂオ向きである唱歌やお話にしても、本質的な幼兒の理解力の程度、又は想像や經驗の格段の差異などを考慮に入れる場合、その取材の範圍も、內容、形式も、可なりの制約を受けなければならない。

これだけの前提を頭において、さて日々實際に放送される幼兒へのプログラムについて贅見を加へよう。

大體、現在、幼兒の時間が實施してゐる放送內容を大別すると三種になると思ふ。說話を主とするもの、唱歌音樂それと劇化の形をとるものとの三である。勿論これらはいつも純粹なお話又はたゞ唱歌音樂として、單獨に演出されることは少い。そしてこの復合的な取扱ひ、立體的な取扱ひはラヂオに最も適合した世界であつて、お話と唱歌と音樂と擬音その他の音響效果の、渾然融合した世界にこそラヂオの生命があるのだともいへよう。然しこゝに便宜的にこの三つを別々に取上げて檢討を加へることにする。

一、說話の形をとるもの。その內容は童話であり、お話であり又物語りめいたもの、單なる報告もあらう、訓話もあらう。いづれにしてもラヂオは常に聲音的に正しい發音、アクセント、を土臺として美しい言葉上手な表現（抑揚、調子）で放送されねばならない。ラヂオの幼兒への說話は、飽くなき幼兒のお話の欲求に當面してゐられる教師や保姆諸姉へ御手傳ひの意味で新らしい材料を提供すると同時に、一面正しい話し方、よいお話の仕方についての一つのモデルを提示しようとしてゐるのである。教育的の意味をもつラヂオのあらゆる分野に於て、國語の問題、ことば

の訓練は重要視されねばならぬと確信してゐるが、殊に幼兒の時間に於けるこの問題は、最も愼重に取扱はれねばならぬ。それは音樂的訓練と共にラヂオの生命であると云つても過當ではないと思はれる。標準語とは何ぞやといふと頗る問題が錯雜してくるが、少くとも小學國語讀本が要求してゐる程度の國語――殊に話しことばについては、ラヂオは勿論保姆諸姉も重大關心を持つべきであると思ふ。童話、話し方につき兒童對象の多くの書物が書かれてゐるが、さてそれを聲音的にいかに發聲し表現するかといふことになると、ラヂオは相當の偉力と效果を發揚し得る立場にある。例へば從來の所謂「はなし家」諸氏のお話しの仕方は何らの批判反省なしに之を踏襲し追隨していゝものかどうか。子供たちが喜んで笑ふが、果してその笑ひが子供たちの純粹性を突いた笑ひ方であるかどうか。幼兒は話し手と共に或は驚き或は恐れ、或は悲しむがそれが明日の日本人にふさわしき感激であるかどうか。それは一に話し手の洗錬された感覺と教養に依るところである。勿論相手が幼兒であるといふ條件から、押韻、反復、誇張、對立、漸層、比較等の技巧、それに要すれば伴奏擬音等の效果を加へることはあるが、それも必要にして十分の程度で、徒らに誇張に走り、喧騒に亙ることを避けなければならぬ。現實の「幼兒の時間」が必ずしもこの理想を實現してゐるとは云へないが、少くとも當事者としての意圖はこゝにあるのである。

二、唱歌音樂。前述のことばの訓練と同じく又はより重要な部門である。唱歌音樂に關する國民的教養がラヂオの普及發達以來、急速な進展を遂げたことは萬人の認める處であらう。然し、何と云つても國民の生活環境が歐米諸國に比し、音樂に惠まれること少かつたために、わが國上下の音樂唱歌に對する感受性、適應性はまだ〳〵彼等の足下にも及び得ないのは殘念ながら事實である。視覺の世界以外に廣い〳〵聽覺の世界のあること、音樂の世界に遊ぶことの人間としての幸福を思ふ時は、そして幼兒時代に於てこそ音に對する感覺の訓練が徹底し得ることを思ふとき、われ〳〵はもつと〳〵よい音樂を幼兒に與へたい。或る人は四歲から六歲の間に於てのみ絕對音感の教育が可能だと云つてゐる。少くとも感覺のフレッシュな幼兒時代に於てこそ、よき音樂を與へて彼らの心情を昂め、且耳の訓練をしてやりたい。そして吾々の經驗によれば、幼兒の音樂に對する感受性は相當鋭敏である。よく子供にはこのオーケストラは程度が高すぎるといふことをきく。然し果してどうであらうか。一處にきいてゐる大人には程度が高いかも知れないが、案外、幼兒には受用できるのである。スピーカーから洩れるメロデーにぢつと聞き入るとき、自分たちの知

つてゐる歌曲に口をそろへて唱和するとき、或はリズムに合せて思はず知らず、頭を、手を、足を搖つて喜ぶとき彼らの眼は輝く。大人は、このピヤノは月光が降りそゝぐ處だとか、このフリュートはアルプス山中の朝の靜けさを現すとか、理窟から音樂を知らうとするが、幼兒はすべての感能を働かせて直接にきく。どちらが、音樂の鑑賞の正しい道であるかは明らかである。音に意味はない。意味は受用者が勝手に感得すればいゝのである。但し大事なことは幼兒は感覺を再表現することが、概ね下手であるか、又はむづかしいといふことである。よい音樂をきいて幼兒が「よかつた」とか「面白かつた」とか云はなかつたといふことは、その幼兒がその音樂を解しないとか、その音樂が惡かつたとかいふことの證明にはならないといふことである。音樂は萬國共通の言葉であるといふ意味は、そのまゝ音樂は年齡を超越してゐるといふことにも解せられる。この意味で幼兒への音樂唱歌は、始めが大事であり、又決して俗惡、低級な童謠などを與へて滿足してゐてはならない處である。勿論順序は必要である。適當な手引きも大事であらう。然し決して子供の好む處にあつて、その純眞にして新鮮な聽覺をスポイルしてはならないと思ふ。こゝに「幼兒の時間」の「よい音樂」の意味と主張があるのである。最近「歌のおけいこ」を幼兒の時間でも實施してゐるがこれも前述の趣旨を具體化したい試みの一つである。但し、子供の時間の「歌のおけいこ」は些か高學年向きであり、自然、曲に變化があつて歌はれてゐるやうであるが、「幼兒の時間」のそれは純然たる幼兒向きである。メロデーの奇を狙ふよりは、音域を幼兒向きにして、歌ひ易く、而もその間、音樂的な想を盛る處に趣意を置いてゐるのである。歌手や音樂家を養成するを目的としない音樂教育に於ては、無理な發聲を强いるべきでなく、歌ふことを樂しむ生活、音を樂しむ生活、音樂唱歌を味ひ得る感能を啓培するに重きを置くべきであると思ふ。こゝに放送の主趣はあるのである。

三、劇化の形をとるもの。劇といふものもラヂオの性能からいへば高々、ラヂオドラマといふ一變形に過ぎない。而も幼兒向きのものは唱歌劇にせよ童話劇にせよ、一方には多くの制限があり、而も一方にはラヂオドラマの規約を無視するわけにはいかない。例へば、子供の生活經驗は大人のそれに比し絕對的に貧困である。普通の劇の約束も幼兒には通用しないし、語彙は少く、想像力も弱く、プロットを追求していく能力も弱い。而も幼兒は全體としての劇を感ずると同時に、又一寸した臺詞に妙な印象を殘すものである。劇も分解して考へれば、お話と音樂と音響效果の綜合であるから、一つの言葉一つの音に感興を感ずることを押へることは出來ない。こゝに幼兒對象の劇のむづかし

さが加はるのである。況や言語に言葉の訓練を考へ、音樂に高き情操陶冶を要求する立場からは尙更のことである。然し、そのために劇全體が低調卑俗であつてはならない。どこまでも純粹で、優美で、而も香り高きものでなければならない。一部一部の效果もさることながら、全體として聽き終つた後で、子供たちの心を、魂を高めるものでありたい。小さな胸にホットした溜息をつかせることが出來たら上乘である。それが子供の生活にいかに裨益する處があつたかのみを要求する必要はない。況や聽取後の指導と稱して、何でも再現させたり、又は觀念的に批判を要求することは避くべきである。たゞ劇の進行中觀念の混亂を救ふため、適度の補助的役割を果して下さることゝ、誤り易き部分の批正は是非、指導者に御願したい處である。

以上、說話と唱歌音樂と劇との幼兒向三放送態樣につき、夫れ〳〵の意圖を申述べたのであるが、實際問題としてこの三態樣の區別は便宜的のものであつて、多くの放送はこの三者が適度に混化されてゐるのである。それは要するにラヂオの特性を最も效果的に活用するためであり、殊に幼兒向の放送に於ては、この立體化はヴァラエチーを追求する幼兒の心情に卽應するものなのである。むしろ表情なきラヂオといふものは、理論を追求する講演以外は、すべてこの立體化の形式をとるのが最も效果的であるとさへ思はれる。こゝでは言葉と音樂とが渾然として一體をなし、言葉を解釋することなしに、全體として聽くものゝ心身に迫つてくるといふやうなラヂオ唱歌劇、オペレッタ、ここにラヂオの最も效果的な部面が展開するのではないかと思はれる、そしてこれは對象が幼兒である場合には最もよく妥當するであらう。これらについて、昨年一月より三月に亙つて、全國の幼稚園二十餘に依賴して、放送效果の調査をしたものゝ詳細なレポートが出來上つてゐるが、いづれ公表する機會があると思ふ。

尙幼兒の時間に關して、度々問題になる問題に、時局と幼兒教育といふのがある。ラヂオでも時々いろ〳〵な形で時局を取扱つてゐるが、取扱方によほど注意しないと、徒らに殺伐な氣風を助長させるに終る懼れもある。況や日滿支親善、大陸經營の重大使命を負はねばならぬ第二第三の小國民に、支那に對する敵愾心だけを植えつける如き結果にならぬやう、一言一句にも愼が肝要であらう。「幼兒の時間」では出征軍人に關するもの、軍馬、軍用犬、軍用鳩等に關する愛すべく且感ずべき物語などを主として、間接に時局と事變に觸れるに止めてゐる。

以上「幼兒の時間」について、あまり抽象的な論に走り、まだ述べ足りず、觸れ殘した問題もあるが、これを機會に「幼兒の時間」放送につき實際家特に幼稚園の保姆諸姉の御高見を伺ひたいことを御願ひして筆を擱くことゝする。

子供の虚言

――眞實への教育（一）――

東京女子高等師範學校助教授　倉澤剛

一

偽り飾るといふことなく、いつも眞實を語る子供であつてほしいとは、人の親の切なる念願である。虚言こそは、子供の魂の健やかなる成長を祈る者にとつて何よりも大きな不安の一つでなければならぬ。從つて昔から、子供の躾に思を潜めた心ある人々は、必ず子供の虚言を重大な訓育問題として掲げてゐる。子供の虚言とは、一體どのやうなものであらうか。そして、これに對する教育的處置は如何にあるべきであらうか。

二

一方には「あらゆる子供の虚言的傾向」が主張せられ、他方には「六歳以前の子供に何等咎めらるべき虚言はない」と論ぜられてゐる。果してどうなのであらうか。成程、子供は屢〻本當でないことを口にする。ごく幼い子供でも、屢〻本當でないことを口にする。しかし、子供はこれを虚言として意識してゐる場合は極めて少い。だから、子供の虚言を豫防し、又は矯正する方法を求める前に、我々はまづ虚言とは何であるかを考へて見なければならない。

虚言は「意識的に他人を欺かうと目指す陳述である」（チルリヒ）と言はれ、また「作爲された欺瞞によつて、何等かの目的を達するために、ある事態を意識的に偽つて表現すること」（ライニンゲル）と定義されてゐる。シュテルンによれば、虚言といふのは、「作爲によつて、他のある目的を達するために、意識的に誤つた表現をすること」である。そして、眞の虚言は、次の三點において、他の誤つた表現から區別せられる。

第一に、誤謬の意識があること、自分が今言つてゐることが、本當の事實ではないといふ意識があること。

第二に、瞞着しようとする意圖があること。他人を欺かうといふ、はつきりした計畫があること。この二點におい

て、虚言は單なる記憶違ひや思ひ違ひから區別せられる。

第三に、一定の目的によつて導かれてゐることゝ。何等かそこに目的があつて、その目的を達成せんがための言ひ立てでなくては虚言とは言へない。この點において、虚言は單なる幻想的な言表の誤りから區別せられる。

この三つは、「本來の虚言の徵表」とされてゐるが、このやうな徵表の存在は、すでに精神發達の比較的高い段階を前提としてゐる。從つて幼い子供には、本來の虚言は未だ決して現れない。生後一年以内に見られるやうなものは、大部分は「外觀上の虚言」であるか、又はほんの「虚言への崩芽」に過ぎない。また子供は純粹に遊戯的な言ひ立ての間違ひをするが、これを虚言と見ることの大きな誤りであることは周知の事實である。

そも〳〵虚言は事態の表現である以上、子供は虚言をする前に、表現の能力を具へてゐなければならない。子供はお誕生の前後から、模倣遊戯の形式で人眞似の表現をするのであるが、これが子供の最初の言語的な表現形式である。だから、滿一歳前後、及びこれ以後に至つても、言語能力がほゞ自由になるまでは、いはゆる虚言といふ現象は見られない。

けれども、言語能力が具はつたといふだけでは、まだ虚言の要件としては足りない。子供は最初はたゞ正しい表現だけしか出來ないで、僞りの表現はまだ出來ないといふ段階があるからである。更に、僞りの表現をなし得るに至つても、これを一定の目的に利用することを知らない。これを一定の目的のために利用し得るやうになるためには、ある程度まで因果の意識が發達してゐなければならない。そして、因果の意識が芽生へるのは、凡そ三歳の後半、しきりに「何故?」といふ問を發する時期であるとされてゐる。しかも、因果の關係を理解し得るに至つても、必ずしもこれを直ちに應用し得るとは限らない。何となれば、他の場合と同樣に、理解は應用に先立つものだからである。かやうに考へてゆくと、四歳までは未だ虚言の要件を具へてゐないと言はねばならぬ。よし時として四歳で虚言の要件を具へてゐる場合があるにもせよ、未だこれを自由に利用し得るには至つてゐないやうである。勿論、無意識的な衝動的な虚構は、動物の世界にも見られ、――カムフラーヂといふ現象を見よ――兒童にも早くから現れてゐる。しかし、意識的な、そしてある目的に向けられた虚構としての虚言は、はるかに遲れて現れるのである。

三

子供の虚言として、まづ第一に注意すべきは「幻想に基づく虚言」Phantasielüge である。これは、子供の想像力が大きいところから起る、無邪氣な遊戯性のものである。

例を擧げて考へて見よう。

お隣りの家の三歳半になる太郎は、表に出て自由に遊んでゐたが、ふと外へ出た私のところへ飛んで來て、「うちのお父さんは病氣なの。」といふから私がびつくりしてゐると彼はつゞけて言ふのである。「ね、お父さん病院へ行つたの、もう何でも出來ないの、お母さんは泣いてらつしやるの。」その日の晝頃、子供の姉が私の家に見えたので、お父さんの容態をたづねたところ、太郎の言葉はまるで本當でない。實は、彼の父は額に小さい擦傷を受けたが、痛い〳〵と太郎の前で冗談に大さわぎをしたのであつた。さて太郎は一體私に虛言を言つたのであらうか。否、全く違ふ。現實の世界と想像の世界とを混同してゐる子供は、あらゆることが起り得ることのやうに考へ、事實と可能性との區別が出來ないのである。

この間、私は子供たちに、「春雄さんのお兄さんは、雪にすべつて脚を折つて、今も入院していらつしやるさうだよ。」と話した。すると私の話が終るか終らぬかに、四歳になる夏雄がとんきような聲で話し出した。「もう先、僕も崖から落ちて入院したよ。そのとき脚を折つて、今もまだ痛いの。」これも事實とは違つた言ひ立てには違ひないが、決して虛言と見るべきではない。この子は私の話に强く感動し、自分についても語りたくなり、そしてこれを口にしてみたに過ぎないのである。私はたゞ簡單に、「いゝえ、夏雄さん、それはあなただつたんぢやない。あなたの脚は痛みやしませんよ。」と言つてやると、その子もそれで滿足して、チョコ〳〵と走り去つた。

また、信心深い母を持つた五歳の秋雄は、「夜になると、いつも神さまが私のところへやつて來ます。昨夜私は眼を半分だけ開けて、そこに白髮の神さまを見ましたよ。」と言つたさうである。これも明かに虛構であるが、そこには、ぜひ神さまを見たいといふ、强い願望が動いてゐる。この期の子供に本來の幻想が、かういふ詩的形態をば、あたかも實際の現實のやうに語らせるものであらう。かういふ事例は、この他無數に擧げることが出來る。そして、かゝる虛構の原因は、子供が私達大人のやうに、觀念界と事實界とを區別してゐないところにある。

四

さて、この種の虛構は、勿論まだ本來の虛言ではないが、しかし教育上は決して放置すべきものではない。何となれば、これらの虛構は、內に貯へられた語彙によつて、危險な遊びをしようとする利己的な衝動であつて、これを放置すれば、法螺吹き、自慢癖や幻想癖に陷る虞が多いからである。

これに對する私達の治療法は、「それは違ひます。さうぢ

やなくて、かうなんです、」とはつきり言つてやり、物の本當の姿を明瞭にしてやることであるが、しかし、このことは私達にいろ〳〵の困難を思はせる。

更めて述べるまでもなく、子供はあらゆる生命なき事物を人格化し、生命ある事物と同樣に、生命なき事物と語らふ、しかも眞劍になつてこれと語らふ。のみならず、私達は、子供に假想の神話や童話をまことしやかに語り、またあらゆる自然現象を人格化して語り、これによつて子供に本具の想像力を活潑に働かし、そこに可愛い詩の世界を育んでゐるのである。今私達が、「白雲たなびき小羊むれて……」と、調も輕く、子供と共に歌ひほれるとしたら、そしてそのとき、愛くるしい冬子が空を眺めて、眼を輝かしながら、「御覽よ、來ます、子羊が、お山の麓には羊小屋が……」と言ひ出したとしたら、それは私達が子供に不眞實を言はせるやうに仕向けたのではなくて、實は子供と共に詩的表象の世界に安住してゐるのである。私達は子供の豐かな幻想世界を打壞してはならない。この子供の自由な幻想の奔放をば、殘酷にも「虛言」といふやうな名で呼ぶべきではあるまい。何となれば、虛言は正に不正であるが、幻想は高々不眞實に過ぎないからである。それで、かういふ思想乃至表象による一種の遊戯が、詩の世界に止まつてゐる限り、それはたゞに危險がないばかりでなく、却つて子供の內面生活を豐かにするものである。たゞ私達は、この種の幻想が事實の世界に侵入することを、注意深く抑へなければならない。事物を正しく、はつきりと見る態度を養はなければならない。このやうな態度の養成によつて、私達は子供に、「見せかけ」と「事實」との區別を徐々に知らしめるべきである。そして、このためには、「嚴密な事物直觀」が頗る有意義であつて、動物界や植物界の觀察は、この意味においても、保育の有力な手段たるを失はないと思ふ。（續く）

（二六頁より）

と云ふやうな發達を見るやうになりました。

今日、以上のやうな外面的な發達だけでなく、保育事業の內容も益〻充實せられ、保姆の自覺一般の理解等も日に〳〵深くなり、前途は無限の希望に滿ちてはおりますが、まだ〳〵理論と實際とが一致し我が幼稚保育の理想に到達するまでには、前途遼遠の感が致します。

不斷の努力、研究に依り益〻保育界の輝しい前途を祈つて止まない次第でございます。

殘花聚園（三）

（日本幼兒教育史資料）

東京女子高等師範學校教授　石川謙

三　貝原益軒の育兒意見（一）

益軒はその『和俗童子訓』の中で、幼兒から少年へと生長し行く子供の年齢の發達に伴つて、それ〴〵の時期にふさはしい教育方法を編み出したので有名な學者である。寛永七年十一月十四日（西暦一六三〇）に福岡城内に生れ、正德四年八月二十七日（西暦一七一四）に福岡城外の自邸に歿した。享年八十五である。その『和俗童子訓』を編んだのは寛永七年であるから、彼八十一歳のことである。先づ此の書の「總論」に見えてゐる育兒意見の一端を紹介して見よう。

「凡そ小兒を育つるには、始めて生れたる時、乳母を求むるに、必ず溫和にして愼み、まめやかに詞少き者をえらぶべし。乳母の外、附き隨ふ者をえらぶも、大やう斯の如くなるべし。始て飯を喰ひ、ものを言ひ、人の面を見て悅びいかる色を知る時より、常に其の事に隨ひて、時々教ふればやゝおとなしく成りて、いましむる事易し。故に幼き時より早く教ふべし。もし教へいましむる事遲くして、惡しき事を多く見習ひ、聞習ひ、くせになり僻事出來て後、教へいましむれども、始より心にそみ入りたる惡しき事、心の内に早くあるじとなりぬれば、あらためて善に移ること難し。」

これは幼兒教育に就ての益軒の見解をまとめて述べたものである。教育は、子供の出來るだけ早い時代からはじめなければならぬ。癖が出來、習慣が成立した後で、矯め、直してゆく事は、教へる者にとつても教へられる者にとつても、甚しい困難を伴ふ。惡くなるのを待つて善くするよりは、素直なよい心ばえの中に、よきに導くのが祕訣であるといふのである。

「第一いつはれる事、次に氣隨にてほしいまゝなる事を、早くいましめて必ずいつはり恣なる事をゆるすべからず。やんごとなき大家の子は、殊に早く戒しめ教へざれ

ば、年長じては勢強く位高くして、諫め難し。凡そ小兒のあしくなりぬるは、父母・乳母・かしづきなるゝ人の、教の道知らずして、其あしき事をゆるし、したがひほめて、其子の本性を害ふ故なり。或は暫く泣く聲を止めんとて、あざむきすかして姑息の愛をなす。其事誠ならざれば、則是僞を教ふるなり。又たはぶれに恐しき事ども云聞かせ、より〳〵おゴしいるれば、後に臆病の癖となる。武士の子は、殊に是をいましむべし。幽靈、ばけもの、怪しく誠なき物語、必ずいましめて聞かしむべからず。或は小兒の氣にさかひたる者をば、理をまげて小兒の非をそだて、そらうち(打つ眞似)なゴすれば、驕慢の心いでくるものなり。小兒をもてあそびて、我が心を慰めんが爲に、樣々の詞にて、そびやかし苦め、いかり爭はしめて、ひがみまがれる心をつけ、貪りねたむ心ざしを引出す。しかのみならず、父母の愛過ぐる故、あまえて父母を恐れず、兄を蔑にし、家人を苦め、よろづ恣にして人を侮る。いましむべき事をかへつてすゝめ、咎むべき事をかへつて笑ひ悅び、色々あしき事ごもを見聞かせ、言ひならはせ、しならはせて、やうやく年長じ、智惠いでくる時に至りて、俄に始ていましむれども、其惡しきならはし、年と共に長じ、久しくならひ染みて、本性と等しくなりにたれば、諫を用ひず。幼き時に教なく、年長じて俄に諫むれども隨はざれば、本性惡しく生れつきたるとのみ思ふ事、いとおろかに、まゴひの深き事ならずや。」

幼兒の養育に於て、第一に注意しなければならぬのは、人間一生の生活全體を見徹して、養育の指導精神を定めてかからなければならない。其場其場の子供の氣持の動きや、刹那〳〵の大人のおもひつきで、出たとこ勝負の養育手段を弄ばしてはならない。恐るから叱り、喜ぶから媚びて、其場かぎりの取扱ひをしてゆく樣では、到底子供の現在を子供の將來に結ぶ一貫した生長を、期待する事は出來ない。たとへ子供が泣かうと甘えようと、涙や笑ひにさそはれて、脆くも其場其場の子供の氣持に迎合してはならない。子供に迎合しきれない時になつて迎合を引つ込めて、改めて躾けようとしてもそれはもう遲い。世の中に生れつき惡いと思はれる子供があり、親も他人もそう云ひふらす子供もあるが、實をいふと迎合しきれなくなつた時に、これ迄迎合して來た罪を自ら欺く大人の誤りに他ならない。それ故に子供を養育するには愛がなければならぬが、愛しすぎてもならない。保護しなければならないが、保護しすぎてもならない。それは子供の身體について云ふだけではない。心についても同じ事である。

「凡そ小兒を育つるに、初生より愛を過すべからず。愛過ぐれば、かへりて子をそこなふ。衣服をあつくし、乳

食にあかしむれば、必ず病多し。衣を薄くし、食を少くすれば、病少なし。富貴の家の子は病多くして身よわく、貧賤の家の子は、病少なくして身強きを以て、其故を知るべし。小兒の初生には、父母の古き衣を改めぬひて、著せしむべし。衣のあたらしくして溫なるは、熱を生じて病となる。古語(保嬰論)に、凡そ小兒を安からしむるには、三分の飢と寒とをおぶべしと云へり。三分とは、十の内三分を云ふ。此意は、少しは喝し、少しは冷すがよしとなり。是古人小兒を保つの良法なり。」

それ故に、生れたての幼い子供から養育だけでなく教育についても、充分の注意をはらはなければならない。そしてその爲には、先づ乳母の選擇から氣を付ける必要がある。乳母は子供が目覺めてゐる間いつも付添ふ人であり、子供の生活の一番近しい友達であるからである。子供にとつては乳母程大きな教育者はなく、乳母程大切な還境はないのである。教へるともない、又見せるともない、乳母の生活か、實はいつのまにか子供の生活そのものゝ中に、浸みこんでゆくものである。

「小兒を育つるには、前にも聞えつるやうに、先づ乳母かしづき隨ふものをえらぶべし。心穩に邪なく、愼みて言葉少なきをよしとす。わるがしこく口きゝ、僞りをいひ、詞多く、心邪にして僻み、氣猛く、恣にふるまひ、酩酊を好むを惡しゝとす。凡そ小兒は智なし。心も詞も萬の振舞も、皆其かしづき隨ふ者を見習ひ、聞きならひて、彼に似するものなり。乳母・かしづき隨ふ人惡しければ、育つる子、それに似て惡しくなる故に、其人をよくえらぶべし。貧賤なる家には、人をえらぶ事難しゝいへど、此心得有るべし。況や位高く祿とめる家をや。」

乳母の選擇を重んじ、乳母からくる影響を大きなものに考へた益軒は、つまり子供の境遇を最も大きな教育と考へたのである。といふよりも、還境そのものが、子供の生活であるとさへ考へて、生活それ自らにおいて、子供が自ら學ぶ影響を大きなものに見立てたのである。然し益軒は、乳母とか親とかいつた樣な、人間的要素を含めての生活還境を、唯一の教育者と見てたのではない。玩是ない子供の生活に於てさへも、正しい筋目を立て、正しい理想を負はせる樣に、しなければならぬと考へたのである。この意味に於て益軒は、單なる還境主義者でもなく、自然主義者でもない。朱子學流の理想主義者であつた。

「凡そ小兒を育つるには、專ら義方の教をなすべし。姑息の愛をなすべからず。義方の教とは義理の正しき事を以て、小兒のあしき事をいましむるを云ふ。是必ず後の福となる。姑息とは、婦人の小兒を育つるは、愛に過ぎて、小兒の心に隨ひ、氣にあふを云ふ。これ必ず後の禍となる。幼き時より、早く氣隨をおさへて、私欲をゆるすべからず。愛を過せば、驕出來、其子のため禍となる。」

偏食の話

榮養研究所附屬療院副院長　藤本薫喜

子供の好き嫌ひは、何故に矯正しなければならないか。これは多くの先生や、母親の方々が度々疑問をお持ちになることだと思ひます。もしごはんが嫌ひな子供さんがあつたとすれば、これはどうしてもなほさなければならぬとお考へになるにちがひないが、なまこが嫌ひな子供さんがあつた場合に、それを好きにしなければならないのかと、疑はれるでせう。その疑ひは尤もです。

我々の日常の食品には、非常に重要な食品と、左程重要でない食品とがあります。たとへば、お米や魚や肉やほうれん草等であれば、非常に大切な食物であつて、榮養價に富むものだから、好き嫌ひをすぐなほさなければならないと痛感されるでせう。全くその通りで、食品の種類によつて大切であるものと、左程大切でないものとがあります。牛肉、豚肉、鶏肉、魚肉、卵、豆、豆腐、等は、我々の血を作り、肉を作る爲の重要な原料であります。所が米や野菜は、血や肉を作らうとする場合、左程能率を上げ得る優良な食品ではない。一方力や體溫を作り出す所のもとゝしては米や芋や油、豆等が大いに有效なのです。然し肉類や卵類は、體溫や力を作ることに對して、比較的都合が悪い。そこで、食品はそれ〴〵に天與の使命をもつてゐると考へられます。トマトやほうれん草、キャベツ、チシャ、レタス、椎茸等は、肉を作り又血を作る主原料とはならないけれど、ビタミンが澤山あつてABCDE等々おのがじし特長を持ちながら、含有してゐます。そうしてそれ〴〵に身體の機能を圓滑ならしめるやう、働いてゐるのであります。又魚の小骨は、胃の中に入れば、直ちに解けて、子供の骨となり齒となり、發育を良好ならしめるのであります。そこで私達が出來るだけ多種類の食物を食べれば、それだけ多く天與の惠みを受けることになります。

そこで、もしかりに、肉は食べられないが、魚が好きだから、血を作り、肉を作るのには差支へないと安心してゐられるお母さんがありはしませんか。東京や海岸に住まつてゐる場合は、御安心でせうが、もしかりにコレラが流行つたり、滿洲の奥地へ行つたり、シベリヤへ行つたり、ごく

近い所では日本内地でも不便な山奥へ行つた場合に、魚がない時にはどうしますか。一日か半日のことならがまん出來ませう。それでもよくはないのだが、もし一月も一年もその狀態が續けば、必ず發育はおくれ、貧血は起り、榮養不良、虛弱兒となることは、火をみるよりも明かでせう。ほうれん草、チシャ、トマト、大根葉、キャベツ、レタス、カブの菜、人參等、卵黃等に於ても、又然りといへませう。だから偏食といふものをさけなければならない理由が、こゝにあるのであります。

然し、なまこが食べられないからといつて、今急に驚くことはいらないかもしれない。それはなまこが重要な食品とは思へないからです。他の重要な食品が食べられるのであれば、かりに許せることだと思ひます。しからば、いかなる食品が、重要であるか、それは次にそれ〴〵の食品の主成分からして分類してみませう。

①蛋白質性食品、

動物性蛋白

獸肉、鳥肉、魚肉、貝類、乳類、卵類、及び之れらの加工食品、

植物性蛋白

豆類及び加工食品（味噌、納豆、豆腐、豆乳、高野豆腐、ゆば、がんもどき、油揚、生揚、麩）。胡麻、胡桃、落花生等の種實類。

②カロリー性食品

(一)、含水炭素源

穀類、芋類、糖類、それらの加工食品（片栗粉、麵類、パン、メリケン粉、白玉粉、道明寺粉、春雨、もち菓子類）その他の野菜果物（南瓜、慈姑、百合根、蓮根、干ぴよう、ぜんまい、栗、バナナ、等）

(二)脂肪源

動物性脂肪、植物性油、バタ、油を使用して製した加工食品（油揚、がんもどき、生揚、その他）くるみ、胡麻、落花生等の種實類

③無機質

野菜や果物や穀物等の皮。こんぶ、わかめ、ひじき海苔等の海藻類、魚、鳥、小魚等の骨

④ビタミン

ビタミンA　動物の肝臓、乳類、チーズ、バター、ヘット、數の子、卵黃、いわし、鮪、鰻、鮭、かき（貝）。赤黃綠の色のついた野菜例へばほうれん草、トマト、人參、青キャベツ、南瓜、大根葉その他の青菜、甘藷等、

ビタミンB₁　玄米、そば粉、半搗、七分搗米、豆類、落花生、胡桃、人參、トマト、青キャベツ、ちしや、馬鈴薯、海苔、牛乳、獸肉、ハム、ベーコン、卵黃等。

ビタミンB₂　牛の肝、腎臓、玄米、半搗、無砂七分搗米、豌豆、青キャベツ、ほうれん草、獸肉、牛乳、卵白、鮭罐詰。

ビタミンC　生野菜、果物

ビタミンD　鮪、鰮、鰊、卵黄、かき(貝)牛乳、その他乾物類(するめ、煮干、ひもの、干椎茸、切干の野菜等)。

偏食はなぜ起すのでせうか

第一の原因はお母さんにあるのです。お母さんが嫌ひな食物は、大抵みなお子さんが嫌ひです。お母さんが嫌ひでなくても、お父さんが嫌ひだつたり、兄さん、姉さん、友人、特に先生、或ひは崇拜するおぢさん、おばさん、又は好きなねえや等の嫌ひな食品は、さかく子供さんにうつりやすいものです。即ちこれが個人的に受ける感化です。最もおそろしいものゝ一つです。

第二の原因は家庭的に受ける影響です。家々の食品の買入れ方、或ひは調理の仕方にも、それ〴〵の家のクセがあります。ある家では支那料理式を好んで、チャプスイのやうなものを、よく作る所があるかと思へば、一方では西洋料理式に、バタで燒いたり、テンピで燒いたりするやうな式を、するやうな所もあるでせう。又ライスカレー等は、一度もつくらないやうな家もあるでせう。旧舍の舊家などでは、老人の宗教上の習慣からの四つ足の物は食べぬとか、なまぐさ物はたべぬとかいつて制限してゐる家もある。だからして、榮養聚落(虚弱兒を集めて健康の增進をはかる林間學校)で、ライスカレーを作つたところが、本所出身の小學生が、全部食べられなかつた、といふ失敗をしたことがあります。即ちこれが、家庭的な習慣による結果、偏食の起つた一例であります。つまり食べず嫌ひといふ部類に入る。

第三には地方的に受ける影響です。簡單な一例をあげて、あとは皆さんの御考慮に任せます。その一例とは、ソーセーヂのない地方や、納豆のない地方に、それらを持つて行つても、食べ方もわからないだらうし、又おそろしくて手もつけられないでせう。

第四の原因は、食べて中毒や下痢を起した結果、以來見るのもいやになつたやうな人もある、これは適當な方法によつて、矯正することが出來ます。鯖、蟹、蝦等、又カキのフライを好んだ人が、匂ひをかぐのもいやになつたやうな方が、ありはしませんか。

その次は特異體質の人。これは一萬人に一人か、五千人に一人か位のものですから、中毒症狀が起るからといつて、子供を特異體質にしたがるお母さんは、御注意下さい。

これらの原因を知れば、矯正方法は最も容易でありませう。

矯正法

偏食の矯正方法として、次に上げてみます。

一、周圍の者が注意する事。
（母親がまづ好き嫌ひをなくする（父親も同様）もし父母共に矯正出來ぬ時は、表現しない事。）

二、家庭の惡習を改める事。

三、廣く食物を求める事。

次に實際方法として、具體的矯正方法をのべて見ませう。

一、料理法をかへる事。卽ちごまかして食べさせる方法。

その食品が好きとか、嫌ひとかいふのは、つまりあまり見なれぬ形、毒々しい色、或ひは子供にとつて、特に嫌ひな色、なれない味、舌觸り、等からくる場合が甚だ多い。たとへば人蔘の一種特有の臭、色。牡蠣の軟かな齒觸り。肝臟の味、臭ひ。等でありますが、人蔘の臭味、肝臟の味等は、葱や生姜を用ひることによつて、消すことが出來るし、味、齒觸り、色等は、みぢん切りにして、他の好む食品と一緒に調理します。そして選り出せぬやうにしておく。又人蔘等は、大根卸しに混ぜるとか、みぢん切りにして、コロッケ、オムレツ等に入れる。或ひは子供の好むものゝ形にする。最も效果のあるのは、子供の好む料理の中に、わからぬやうに入れておくことです。

かやうにして、次第に形を見せ、味、臭ひにも馴れさすのです。

實例　一番多いと思はれる人蔘を例にとつて

(1) 卸し人蔘の應用

・卸し大根と卸しりんごと共にまぜ合せ色々の卸し和へをつくる

・オムレツ、卵燒等の中にまぜてやく

・玉葱等と共に油で炒め、炒め御飯の材料にする

・天ぷらの衣の中にまぜる

・挽肉、魚肉摺身、豆腐、他の野菜等に玉葱、食パン等を加へてお團子をつくる際に混ずる、この團子は、片栗粉をまぶして揚げてから色々の料理に應用するのがよい。

(2) 裏ごし人蔘の應用

・裏ごし人蔘に砂糖を加へて氣永く煮つめ、最後にレモンエキスを加へてジャムにする

・裏ごし人蔘をゆで汁でのばし砂糖・ゼラチン・レモンエキスを加へてゼリーとする、中にみかんの果汁を加へみかん二つ三つをうかせる時は人蔘が用ひられた事を全然氣づかず

・魚、えび等のボタージュ、又はスチウに混ずる

・コロッケのポテトに混ずる

・味噌汁に混ずる
・茶碗むしに混ずる
(3)みじん切人蔘の應用
・コロッケ、かき揚の中に混ずる

二、競爭心を利用する方法。

父或ひは兄、姉、友人等と共に、食事をして、お互ひに嫌ひであるが、どちらが先に食べられるやうになるか、と競爭心を起させる。(聚落、寄宿舍等の團體生活の場合に用ひて效果ある方法です。)

勿論その場合には、子供に勝たせなければならない。

三、空腹になりきつてゐる時期に與へる方法

お腹をペコ〳〵にさせておいて、少量を與へる。お腹の空いてゐる時は、不思議と何でもおいしい。それが原因となつて、嫌ひなものが好きになつた例は、我々でも多い。

四、褒美を與へる方法

これを食べたらお利巧さんになるから、御褒美をあげませうね。又は、今度の日曜日は動物園に行くんだけど人蔘が嫌ひではお猿さんと仲良しになれないから、坊やも少しでもいゝから食べませうね。等と氣を誘ふ。

五、我々に食物がどう役に立つか、と話して聞かす方法。

少し大きい子供には、比較的容易である。この魚を食べると、身體が大きくなつて、背も伸びるし、お手々もお兄さんのやうになる。さうすればすぐに軍人さんになつて、戰爭にゆかれるのよ。又は宗教をとり入れて、神樣が下すつたものだから、有難く頂くのよ。母樣が作つて下さつたものだから食べませうね等といひきかせる。

その他、ビタミンの話、蛋白質の話、等やさしく解いて、それらがどんな食品中にあるかを話してやる。子供は知識欲にもえてゐるから、非常に興味をもつてきくものである。

六、絕對に食物に就ては小言をいはぬといふ方法。

それには一家族全體が、協力しなければならぬ。特に父親にもその覺悟をしてもらはねばなりません。お母さんのお料理に對する不信用、輕蔑は最も警戒しなければなりません、そこで一家の畏敬のまとである父親が食事の際に、調理の不業、材料の不滿、味の不味等を云ひたてる事は子供に食物の我儘を教へる最も有力な武器となります。從つて父親は食卓にのぼせられた食物を絕對に信用し、感謝してゐる事を表現し、少し位不味であつても舌鼓をうつて食べ終る事が大切だと思はれます、時には、食後に、「體中に元氣がついて氣分が爽快になつた」とか、「頭が判然して來た」とか云つて、お母さんのお料理が如何に榮養的に合理的であり、全部食べるべきであるかといふ事をほのめかすのもよいと思ひます。

七、強制方法。

子供の常に怖れてゐる父親なぞから、強制的に食べさせる。然しこの方法は、あまり用ひたくない。

八、食物によつて中毒を起した後、その食品を嫌ふやうになつた場合。

わからぬやうに調理する方法を用ひて、ごく少量を食べさせてみる。樣子をみて食後變化がなければ、次に少し增量して與へる。かうして次第〳〵に增して行つて、遂に以前の狀態に復さしめる。

この場合の注意として、強制的に食べさせてはいけない事。又食べた直後嫌ひな食品が混つてゐたのだといふことを、知らさぬこと。注意すべきは醫師の協力を得る事。

九、食物に對する特異體質

これは醫師その他に御相談されるのがよいでせう。

◎

母親の盲目的な愛情から、坊やはこれが好きだから、と常に子供の好むものばかりを食べさせてゐて、遂に偏食兒にしてしまつたやうな例は、今迄に往々あつたのではないでせうか。しかし矯正すれば今からでもおそくはない。一日でも早くそのやうな偏食兒をなくして、强健な國民をつくり上げねばならないと思ふのであります。

○

元日はきれいな朝でした。

ことしは、例年よりも深い心を籠めて、神棚を拜みました。

雜煮を濟ませてから、風あがりをぬく〳〵と着込んで、ストーブの傍に寄りそつてゐると、けたゝましい電話。

電話を聽いたものが大きな聲で報告しました。

お產ですつて……

それは知り合いの若い家庭で、待つてゐる出產の近づいた知らせだつたのです。

元日に、お目出たいこと。

女の聲である。

元日の誕生なんて、ほんとにあるんですね。

男の聲である。

私は、家人を促して、急いで見舞はせたが、その留守。

書簡箋に、筆だけは新らしく、

元朝の、早咲の梅見つけたり。

これは、さつき硝子戸越しに、一寸目にはいつた庭の古梅の白い一輪をに因んだ祝句である。

ラヂオからは、今井慶松氏の箏曲「十返りの松」が美しい音に流れて來ました。

年賀ついでに、餘白が出來ましてと言つて來たKさんが、竹の裾模樣の美しい紋服姿で、此の無駄書きをにこ〳〵待つてゐます。

(S・K)

子供の齒は母親の責任

――妊娠と齒――

湯淺泰仁

婦人が妊娠すると唾液の性質が變る、口の中が不潔になり易く、隨つて臭くなる。又齒齦が赤くなつて腫れ、出血し、時には潰瘍になつたり腫瘍になつたりする。尙ほ齒が浮いて良く嚙めなくなつたり、自分で何ともないと思つてゐた齒が痛んだりする。一度に澤山齲蝕になつて湯や水が滲みだし齒刷子が痛くて使へなくなる。且又今迄有つた齲蝕が急に惡くなつてボロ〳〵に壞れたり、齒齦に膿がたまつたりする。是等の變化は御產が濟んで丈夫になれば治るが其儘捨て置いては酷い結果に成るから是非共齒科醫の手當を受けなくてはならない。

妊娠すると何故齒齦が腫れたり齲蝕になつたりするか？學者の研究に依れば妊娠すると色々の「ホルモン」の出方が普通と違つて來るので前記の諸症狀を呈し隨つて口腔內が不潔になつて、細菌が盛んに殖えて齲蝕となる。一方には石灰鹽、燐酸鹽、「ビタミン」が不足するので一層抵抗力が弱くなると考へられてゐる。

一般に婦人は二十一歲から四十歲の間に齲蝕が增すと云ふのは此の期間に多く妊娠する爲である。隨つて度々妊娠した婦人には酷い齲蝕が多いものである。

母體と胎兒との關係は齒に大いに影響あるもので不完全なる母體より生れる子供は多く不完全なる齒を生るものである。胎兒の齒は二ヶ月頃より發生が始つて四ヶ月頃には石灰化が開始されるものである。故に乳齒を健全にせんとすれば既に妊娠時に於て注意を要するものである。卽ち榮養攝取が肝要で前記の要素を充分含むだ食物を必要とする。

又妊娠四、五ヶ月頃には「ツハリ」と稱して食慾が減退し、偏食に成り勝ちにて榮養がとれない人が少くない。斯る場合こそ胎兒の齒に影響を及ぼすものなれば注意が肝要である。

齒の衛生(女子體育展の一部)

つまり妊婦は御産が濟む迄は自分の爲にも又胎兒の爲にも、先づ口の中を清潔になし、榮養をさることに氣を付けなくてはならない。

注意事項を擧げれば次の如し。

一、悪い齒は妊娠しない内か或は妊娠の初めの中に完全に治して置くこと。

一、度々「含嗽」をすること。

一、叮嚀に齒を磨くこと。

一、色々の食物を取り合せ殊に野菜、海藻、果物、等を澤山食べること。

一、戸外に出て太陽に當ること。

表紙の繪

瓜食めば　子等思ほゆ　栗食めば　況してしぬばゆ　何處より　來りしものぞ　眼交に　もとな懸りて　安寢し爲さぬ

とは山上憶良の子を思ふ切なる心、

銀も金も玉も何せむにまされる寶子に如かめやも

と共に子供の事にたづさはるもののうれしい歌の一つである。

(及川)

記念展覽會を開催して

感應幼稚園　青柳節子

武藏野の一隅、中野寶仙寺の公共事業として、本園が創立されて早十二年の星霜を經まして、先般十週年の記念祭を催しました。然し、これは本園の記念祭といふよりも、むしろ、經營者としての寶仙寺の公共事業、卽中野高等女學校、感應幼稚園、兒童相談所、佛教保姆養成所、密教文庫兒童圖書館、以上五大事業の完成記念祭と申すべきでありませう。本園としては、一昨年既に十年は過ぎてをりますが、兒童圖書館の落成がをくれた爲に、都合で本年に延期されたのであります。

非常時局下、記念祭も至つてさゝやかな催しではありましたが、幼稚園としてはこの機會に、之迄の保育の業績、つまり十年間の仕事をまとめて御目にかけ、斯界の方々の御批評も頂き度いと思ひました。幼稚園も創立當時の六十餘坪の貧しいバラック建に比すれば、現在の二百三十餘坪及都會で家並の見えない一千百餘坪の園庭は、幼稚園の擴張發展ではありますが、これとても、費用を投ずれば出來得るものに過ぎません。そこで園兒の生活と指導の展覽會といふ名にして、小さい催しではありますが、研究をまとめて、發表することに致しました。

會期は一週間でありましたが、幸ひ東京女高師幼稚園の諸先生を始めとし、東京市外有力幼稚園の關係者五百餘名の他、多數一般の御參觀を得、御批評を賜りましたことは、誠に深い喜びであります。

× × ×

園兒の生活と指導展覽會は簡單に述べますならば、幼兒が、幼稚園へ入園致しましてから卒業までの、一ヶ年間の生活と指導の方法を、成るべく實例乃至實物でお目にかけるものでありまして、一般社會に、また家庭に、正しく理解されることのなか〳〵困難な幼稚園を、少しでも理解を深めるために役立てばと考へまして、努めて具體的に、陳列することに致しました。斯うした指導案のもとに、日々斯うした生活を送つて卒業するものである、と云ふことを、目の當りお目にかけることに力を注ぎました。

先づ順序として、幼稚園入園前。卽ち、子供を幼稚園へ

入園させるに先立ち、お母さまに、是れだけは先づ知つてゐて頂き度いと思ふことを例記、說明いたしました。次に入園後は、子供は幼稚園へ入園すると同時に、お母さまは母の會へ入會して頂く事を示しまして、愈〻四月から翌年三月までの十二ヶ月間の園兒の一ヶ年の生活と指導案を陳列したのでありますが、基準になるものは各月の保育要案でありまして、四月の保育案は四月の園兒の生活の指導案として掲げてまゐりました。また生活訓練要目は、各月、四ヶ條に縮めて解り易く「繪とき」に依つて說明致しました。また園兒の生活を實例、實物で說明出來ないものは、遊具、教具、を陳列し、また、寫眞、記錄、統計などで補ふことにしてみました。

左記に陳列の順序を概略いたします。

一、入園前　（お母さまへ）

保育方針、設備、現況、沿革、身體檢査詮衡の標準、入園手續と園用品、園則

二、入園後

（イ）幼兒は幼稚園へ→幼稚園の一日の行事寫眞（自由遊び、ラヂオ體操、佛前禮拜、國旗揭揚、保育（指導）、晝食等各種）

（ロ）母は母の會へ→母の會の目的、事業

（昭和十二年度事業概要）

五月の生活と指導案（本展覽會場の一部）

三、園兒の生活と指導

四月→保育要案、生活訓練要目、行事及生活を現す各種教具、遊具、並寫眞、手技製作品一般、身體擁護

要目と説明

五月以下同じ

四、卒　業

同窓會↓書道會、舞踊會、繪畫會の經營（會員は同窓會員に限る）

五、參考陳列

尚參考陳列として、本園にて、昭和四年に製作致しました本園獨特の人形劇舞臺、「おこもだち座」並多年に亙り製作いたしました人形芝居のギニョール及マリヨネット、拾六組、紙芝居四組、影繪三組等を陳列公開いたしました。

× × × ×

生活訓練要目は各幼稚園の環境、保育方針、毎月の行事などに依つて各々異るものと思ひますが、當園で實施してをりますもので、今度展覽會にて毎月繪話を以て説明いたしましたものを、左記にしるします。

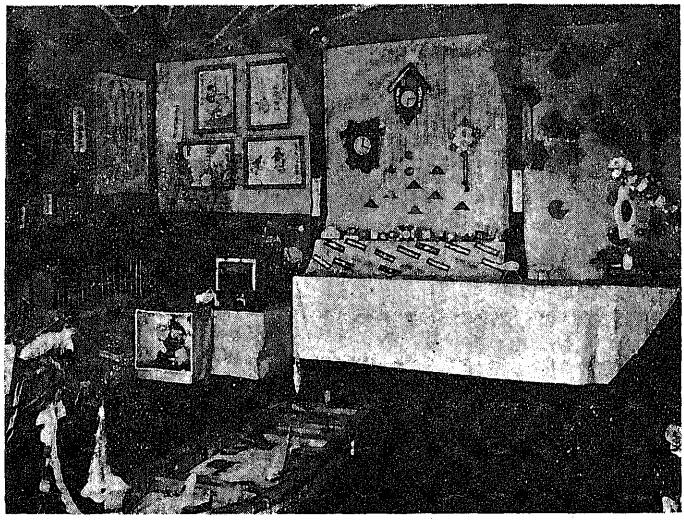
四月　靴帽子の始末、紙屑は紙屑箱へ、御不淨は綺麗に。
　手を洗ふ。よい言葉を使ふ。

五月　友達と仲よく、神佛前にはお手々を合す、遊具の後始末、食事は行儀よく。

六月　道は左側信號に注意、生もの食べすぎ注意、齒を磨く、先を爭はぬ。

七月　早寢早起き、水栓はよくしめよ、生きものを可愛がれ、御先祖を大切に。

九月　朝は元氣よく幼稚園へ、御返事はハッキリと、先生の指圖を守れ、お室に砂ほこりを入れぬ。



七月の生活と指導案（展覽會場の一部）

十月　いつも活潑に元氣に、品物を大切にせよ、ころんでも泣かぬ、負けても泣かぬ。

十一月　立派なお國日本の子供、神佛にはお詣りせよ、正しい姿勢、お使ひのお稽古。

十二月　火の用心、手足をきれいにせよ、夜ふかし食べすぎせぬ、少さい者をいたはれ。

一月　年齢の自覺、合嗽の練習、扉の開閉に注意、正しい整列せよ。

二月　時間を守れ、先生のお話を默つてきく、所有品の整頓、勝手に席をはなれぬ。

三月　尋一年生への自覺　年長組となる自覺

× × × ×

展覽會は、最初たてました計劃案よりも時日を要しました上に、十二坪の保育室四室は通路を除いて壁面より床上、ギッシリ一杯に配列致しましたが、陳列してみますと、說明の不充分の處や、要點が脫落してゐたりして、あれも、これも、後から後から出て來て遂には、まあこれ位で、と切上げを餘儀なくした點でありました。これもこういふことに慣れない爲だと思ひますが、準備を初めましてから、ほんとに大變な仕事だと幾度も幾度も嘆息しつつ、目の廻る樣な忙しさの中に、懸命に準備を急ぎました。

そんな譯で、最初の計劃では、園兒の一ヶ年の生活指導を一貫して陳列しても、尙保育室に空間が有る豫定で、かつて本園で調査研究致しましたもので、尙展覽會に公開するために準備しておりました左記の

イ、園兒の辨當の調査と偏食の問題

ロ、園庭に於ける子供の遊びと動きの調査

ハ、社會性の發達狀況調査

ニ、齒科治療實施成績

ホ、環境と設備兩方面よりの健康增進の諸施設

等を細く說明し度いと存じましたが、陳列の場所がなくなり、それに人手も行きとゞかず遂々割愛の餘儀なくされました。尙御參觀の皆さまのためにプリントの用意も間に合ひませず返すゞゝも殘念に思ひます。たゞ、皆さまから頂いた、貴い御意見や、御鞭撻の御言葉を唯一の糧に、今後一層懸命な努力を續ける覺悟でございます。

保育實習科生徒募集について

今年度の東京女子高等師範學校保育實習科生徒募集の大略は次の由にきいて居ります。（編輯部）

募集人員　凡二十四名
出願期限　二月一日ヨリ同月廿八マデ
試驗期日　三月十三日（月）十四日（火）
官報廣告　一月廿日頃
問合先キ　東京女子高師教務課（東京小石川區大塚町）

保育用品研究會第一回狀況報告

――（手技材料の代用品と廢物利用について）――

みどり會幹事

日支事變も三度の春を迎へ、いよ／＼長期建設の期に入りました。戰地の皇軍將士の御奮戰を想ひ銃後の護をいや深くする爲、私共保姆も何か御奉公をせねばならぬと考へまして、みどり會幹事がより／＼相談の末、消費節約、資源擁護を目標に手技材料の代用品、及び廢物利用を皆樣で考へ持ちより研究する事を去る昭和十三年十月計畫致しました。そして會員の保姆の職にある者は地方の方まで呼びかけまして良き御考案もがなと研究日の十一月二十八日を期待して居りました。此處に當手技材料研究會日の模樣の大略を記して皆樣方の御參考とし又、新しい御創案の糧とも致し度いと思ひます。

女高師附屬幼稚園の組の一室にて倉橋先生、及川先生、菊池先生、小島先生、杉山先生の他在京會員約三十名が集りまして、持寄りの製作品を中央の机上に陳べ、なごやかな氣分の內に開會致しました。

先づ「この會の成立から出品者と審査員とが、同席、同人であるから、うつかり惡口を云へぬぞ」との、相變らずの倉橋先生の巧みな諧謔に大笑ひして、進行役になつていたゞき、種々の御批評をうかゞひつゝ、研究が進められて參つたのでありますから、どうぞその積りでお讀み下さいませ。

（第一）番町幼稚園出品の**古紙利用の所謂新聞粘土・紙粘土。**

それでおいしそうに作られた握り壽司、チキンライスから始りました。之は計らずも芳林幼稚園から、一輪ざしと壁掛、女高師附屬幼稚園の一先生からはお雛樣が同じ原料でほゞ同じ製作過程を經ました物が出品されてありますので、一纏として取扱ひ個々の作品の特徵や長所、短所を話し合ひました。元來この古新聞紙利用は實驗なさつた方もなか／＼多數ありますが、これ等のやうに幼兒の手技材料として直接に使用し得た事は今までに餘り見なかつたやうなので、思はず研究に實が入りました。番町幼稚園の製作過程は、「まづお通知の藁半紙の殘り、古新聞紙、廣告紙等を（新聞紙二十枚で四十人分の材料を得）子供に小さく千切らせ、バケツ等の容器に入れ、水に浸して一日―三日間放置します。次ぎにこの水を減らして、その中で紙を子供によく揉ませ、相當細かくなつたらよく絞つて水氣をとります。別に麩のりを煮て置く。分量は新聞紙でしたら二十枚に麩のり一枚又は一枚半。之れを絞

つておいた紙と混ぜ合せて、手にのりのヌラ〳〵した感觸が感ぜられない程度で然かも何となくなめらかな感じのする位の分量で糊は丁度よく、そこで子供の目的の物を粘土の樣に製作いたします。二日又五日位で完全に乾きましたら着色して出來上りと云ふ事になります。」この出來上つた握り壽司やチキンライスはいかにも輕く落しても毀れず。又他の紙粘土のやり方は紙を煮なければならないが水に浸すだけであるから、子供にも材料が出來るまでの操作をさせ得る事、又乾燥が早い事等が一同感心するところでありました。

芳林幼稚園の一輪ざしは、新聞紙と麩のりを混ぜ三十分程煮たものを空瓶にベタ〳〵と着けて色をぬるとの事。壁かけに作つてありましたのは、新聞紙と麩のりと重曹を入れて、約一時間煮たもので、之は質が緻密でゴム粘土の樣な柔い感じが出て居りましたが、乾燥するのが一ヶ月もかゝり型が變るとの事でありました。女高師のは前のと同じ方法で、可愛いゝ玉子形のお雛樣の十人揃ひで美しく採色してあります。倉橋先生の御批評に曰く、「今までもあつた材料ではあるが、之を子供自身が使つて遊ぶと云ふ事が新しい。粘土に代るものとして經濟的でもあるやうだから、大いに利用したが良いと思ふ。しかし未だ問題は殘されてゐる。例へば麩のりを入れるとか、昭和糊を入れるとか、又新聞紙の他畫用紙の切り屑その他種々の紙でも利用出來るか等、皆で研究して貰ひ度いとの事でありました。及川先生からも粘土と比較して粘土の樣に幾度も使用出來ないし、又何時でも使へるわけにはいかぬし、材料の保存が困難であるが、製作後毀れないのが何よりの長所であらうとのお話でありました。會員も色々と話合ひましたが番町のお壽しや母校のお雛樣は皆々推賞する處でありました。

（第二）本郷第一幼稚園の**オガクヅ利用**

之は桐のオガクヅと生麩を混ぜ合せ粘土の樣に使用したもので、丸い可愛い器が出來て居りました。感じが非常に柔かで、落してもわれずなか〳〵良いとの評もありましたが、桐の木の細いオガクズを何處の園でもが直ぐ手に入れる事が困難ではないかと云ふので一般への利用價値は餘り望めないとの結論でありました。

（第三）番町幼稚園の**玉子の殼利用**

鷄卵の殼に初め着色して置き、畫用紙に、望む形に糊を付けその上に適當の大きさに割つた殼をのせ指先きで壓し潰しつゝ張り付けて、チュウリップと景色を表してありましたが、玉子の艶が出てイタリーのモザイクを想はせる製作でありますので、モザイク遊びとしようと、倉橋先生の御命名でありましたが、さて材料が玉子の殼ですから、玉子の殼があつた時にと云ふ事になりますが、この玉子ばかりがモザイク風の製作表現をするものでなく、他に毛絲の細く切つたもの、色紙の使ひ屑を刻んだもの、布切を刻んだもの、砂等が材料に利用出來、しかも現在使用してゐる園もあるとのお話が出て、それなら玉子に限らず屑物を利用出來るのであるから、なか〳〵有望、大いに研究し又實行してみやうとの事になりました。

（第四）番町幼稚園の**經木利用**

菓子屋から甘い物を包んで來た經木を種々利用製作したものでありますが、經木の性質上子供の手を切る危險もあり、少々製作法が困難であると云ふ事で、點數なしの樣子でありましたから、詳細を避けてこれだけに致して置きます。

（第五）千葉幼稚園の**廢物を使用した種々な手技**

石鹸の空箱で椅子、化粧品の空箱で鏡臺、包み紙の模樣の美しい所で紙の柿樣と紙ぶとん、チョコレートの空箱で飛行機、等それこそ各々の家庭から日常に出る廢物を子供の遊びの中へ上手に當嵌めて利用したもので丹念な保姆でありますなら誰もが考へ又現在實行してゐらつしやる事でありませうが、其の當嵌めたお考へのお上手な事、又地方の會員であれだけ多數の方に募集致しましたのにこの園だけが送つて下さいましたその御心盡しと御努力に皆々敬意を表した次第で御座います。

（第六）麴町幼稚園の**古本利用のメガホンと防毒面**

子どもの繪雜誌の古くなりましたのへ、ポスターカラーで着色して作つたものでありました。畫用紙の節約として適當な方法である樣に考へられますので、一同その利用法に御贊成の樣子でありましたところ、母校の及川先生及他の一園から、古本でありましても切拔いて遊んだり他に利用する事は、未だ廢物にならぬ本まで粗末に扱ふ傾向を子供に來す事があるから、之は幼稚園ではさせない方が良いのではないかとの論が出て參りました。其處で倉橋先生も力こぶを入れて、夫々の意見を聞いて下さいましたが、古本を廢物利用として手技製作をさせても、他の本を決して粗末にしない樣な良い躾けが出來る園はともかく、幾分でも本を粗末にするやうな傾向を幼い頭に植ゑつける事は避けた方がよからふ、まづ使はぬ方が良いとの結論で御座いました。

その他本郷第一の方の持參の花を賣る時包んでくれる薄い紙利用の大根や、夜店で買はれた爪がき帖等は、研究會の爲の苦しまぎれの御出品との事で、倉橋先生からも數々のお口の惡い御言葉でしたが、これとて皆の大笑の種としそうないゝ和やかな心で夕刻まで賑かに熱心に話し續けられました。これがその日の大體で御座います。

集まつた者一同が全くの研究的態度で、それ〴〵の製作品に就て、眞面目に考へたのでありますから、もつと〳〵いろ〳〵の考案品がよせられましたなら、きつと一層皆樣の利益であつたでせうと存じ、出品の少かつたことが、心から殘念で御座いました。しかしこれとても、聖戰三年に及びながらも、私達の幼稚園までは、物資缺乏の嵐がそう甚しく襲ふて參りません爲であると考へれば、全く皇國日本のお蔭と感謝しなければなりません、併し又一方、もつとしつかり深く考へてよく研究せねばならぬことゝも思ひました。

他にお手紙で二通參りましたが、その中で、ポスターの紙を集めて畫用紙代用にする事や二又鍑に代りにセロハンのこよりで結び玉を作つて使用する法等が、それ〴〵いゝ參考になると存じました。

ハイディ（第十回）

――ヨハンナ・スピリ原作――

津田芳雄譯

九、ゼーゼマン氏のお歸り

それから二三日たつて、クララのおうちでは、お父さまのゼーゼマン樣がお歸りになつたといふので、うち中がごつた返してゐた。ゼーゼマン氏はいつもごつさりお土産を持つて歸るのだつたが、この日も、セバスチャンとティネッテは、てんてこ舞ひをしながら、いくつも〳〵の荷物を、馬車からお座敷へと運んでゐた。

ゼーゼマン氏はまづ何より先きに、クララの顏を見に行つた。ゼーゼマン氏には目に入れても痛くない娘であり、クララには世界中で一等すきなお父樣なので、父娘は久しぶりの對面で、ほんたうにうれしさうだつた。それから、遠慮して隅つこに引つ込んでゐたハイディにも、ゼーゼマン氏は手を差し出して、やさしく云つた。

「やあ、これがうちのかあい〻スキス娘さんだね。こつちへ來て、握手しておくれ。よし、よし。ごうだね、クララとは仲よくしてゐるかね。それとも、喧嘩して、泣いて、仲なほりをして、又喧嘩をやり始める、つていふのかね？」

「いゝえ、クララは、いつだつて親切ですね」

ハイディは答へた。

「ハイディだつて、一ぺんも喧嘩なんかしかけたことなくつてよ」

クララもせき込んで云つた。

「よし、よし。それでお父さまも安心だ」

お父樣はさう云つて椅子から立ち上り、

「クララ、ちよつと御飯をたべて來るよ。今朝からまだ何にもたべてないんだからね。あとでごつさりお土産をあげるよ」

食堂では、ロッテンマイアさんがお膳立ての監督をしてゐたが、ゼーゼマン氏が食卓につくこと、なにか大變な不吉なことでもありさうな顔をして、向ひ側に腰をおろした。

「一體どうしたのです、ロッテンマイアさん。ひどくむづかしい顔をしてゐますね。何かあるのですか。クララはなか〳〵機嫌がいゝやうですが」

「ゼーゼマン樣」家政婦はもつともらしく云ひ始めた。「實はクララさまに關したことでございますが、わたくし共は大變なまやかしをつかまされました」

「ほゝう、それはまた、どうしてです」

ゼーゼマン氏は落ちついて葡萄酒を飲みながらたづねた。

「御相談申し上げました例のクララさまのお相手は、わたくしは何でも、お行儀のよい、育ちのよい子供が欲しいと存じまして、それには、よく小說などにございます、まるで淸らかな山氣の中からでも生れ出たやうな、人間の土など踏んだこともないやうな、スキス娘がよいと存じまして——」

「しかし、いくらスキス娘だつて、どこかへ行くには、人間の土も踏まねばならないだらうぢやありませんか。でなければ、足の代りに、羽でも生えてゐなければならないわけですからね」

「まあ、ゼーゼマン樣、わたくしの申し上げますのは、汚れを知らぬ高い山の中で育ちましたものは、下界へ參りましても、きつと別世界から舞ひ降りた、何かの精のやうに、淸らかなものかと存じまして、といふ意味でございます」

「だけど、そんな、何かの精みたいなものに舞ひ降りて來られたんぢや、クララも仕方がないでせうな」

「わたくしは冗談を申し上げて居るのではございません、ゼーゼマン樣。ほんたうに、笑ひごとではございません。侮辱され、まやかしをつかまされ、わたくしは始終ギョッとさせられて居るのでございます」

「どうしてです?。何が侮辱ですつて。あの子には、別にギョッとすることはないやうですが」

ゼーゼマン氏はしづかに云つた。

「あなた樣は、あれのいたしました事を、何も御存じないからでございませうが。へんな人間をつれて參りましたり、いやな動物を持ち込みましたり。——先生が何もかも御存じでございます」

「動物？はて、動物とはどういふことです？」

「全く御想像のほかでございます。時々氣がへんになるのだとしか思へないくらゐ、あの子のいたしますことは、無茶ばかりでございます」

ゼーゼマン氏は、ロッテンマイアさんのいふことを、さして氣にも留めずに聞いてゐたが、勉强相手が氣がへんだとあつては、娘に影響することを故、捨て置くわけに行かなかつた。だが、まさか氣がへんなのは、この婆さんの方ではあるまいなと、向ひ側に坐つてゐる家政婦を、ちらとたしかめて見た。その時、戸が開いて、先生が見えたことが取り次がれた。

「丁度よいところです。どうかおかけ下さい」

ゼーゼマン氏は先生に椅子をすゝめた。

「コーヒーを如何です。——あゝ、どうかもう、御挨拶は抜きにして。ところで、娘の相手に來たあの子供は、どんな工合でせう。動物を持ち込んだり、氣がへんになるといふことですが、一體どういふのでせう」

先生はまづ第一に、ゼーゼマン氏に御歸宅のお喜びを申し上げるためにこの部屋に立ち寄つたことを、云ひたがつたのであるが、ゼーゼマン氏はそれを押し止めて、早速ハイディのことが聞きたいとたのんだ。そこで先生は、いつものくどくどしい調子で述べ始めた。

「わたくしの意見といたしましては、まづ、一方に、あの子供は幼い時から投げやりに育てられて、何等教育といふものを施されず、山上に、外界との接觸のない生活を送つて居りました爲に、多少發達が遲れて居るといふ缺點はありますが、又一方に、そのやうな生活は、無下に排斥すべきものではなく、過度にわたらぬ限り、却つてある種の利益をさへ伴つて居るものでありまして—」

「いや、それはもう、それで結構ですが、わたくしはただ、あの子が動物などを持ち込んで、先生をひどくおさわがせしたとか、又先生は、クララの相手として、あの子を適當とお考へになるかどうかといふことを、一寸お伺ひしたかつたのです」

「わたくしは、あの子供について、あなたに何等の偏見もお持たせしたくありません」先生は、又々辯じ立て始めた。「と申しますのは、一方に、あの子はこちらに參りますまでずつと、非常に非文化的な生活を送つて居りました爲に、人馴れぬ行儀知らずの點はありますが、又一方に、非常に秀れ

た素質に惠まれた所もありますので、全體として考へますれば――」
「いや、それで分りました。わたくしは一寸――娘が待つて居りますから」
ゼーゼマン氏は匆々にして部屋を出て、やつとのことで長談義から逃れた。クララのそばに腰をおろし、さて振り返るとハイディがゐたので、
「いゝ子だから、一寸お使ひをしておくれ」
といひかけたが、さしづめ何も言附ける用はない。ハイディに一寸の間部屋から出てゐてもらひたかつただけなので云ひ淀んだ。「えーとね――、さうだ、お水を一杯くんで來ておくれ」
「くみたてのお水ですか」
ハイディはたづねた。
「さう、さう、とびきり冷いくみたてのをね」
ハイディはすぐに飛び出して行つた。
「さてクララや」ゼーゼマン氏は娘のそばに椅子を引き寄せて、手をとりながら云つた。
「お父さまの訊ねることに、はつきりと、よくわかるやうにお返事するのだよ。お前のあのお友達は、一體どんな動物を持ち込んだのだね。それから、ロッテンマイアさんは、どうしてあの子が時々氣がへんになるといふのだね」
クララはすぐに、造作もなくお父さまの疑問を解いてやつた。あの日ロッテンマイアさんはびつくりして、クララにもハイディの口走つた妙な言葉をすつかり話したことだつたが、クララにはそのハイディの言葉の意味が皆わかつてゐるのだつた。クララはお父さまに、龜のことも仔猫のことも、すつかりお話しした。お山にお日樣が「さよなら」することや、ペーテルの山羊のことや、こわい大きなお山の鳥の鳴聲のことで、ロッテンマイアさんがてつきりハイディを氣違ひだとさわぎまわつたことを話すと、お父さまはお腹をかゝへて笑つた。
「それでお前はどうなんだね、あの子を歸して欲しいの？」
「いやよ、いやよ、お父さま。お歸しになつちやいやよ。ハイディが來てからは、毎日きつと何かめづらしい事が始まつて、知らない間に時間がたつのですもの。せんには、とても退屈だつたの。それに、ハイディつて、いくらでもお話してくれるのですもの。」
「よし、分つた――ほら、可愛いお友達が歸つて

來たよ。おいしいくみたての水を持つて來てくれたかね」

ハイディはコップを渡した。

「はい、通りのポンプからの汲みたてです」

「まあ、あんなところまで、ひとりで行つて來たの？」

クララがたづねた。

「えゝあそこのはとても冷いのよ、でも、ずゐ分遠かつたわ、一等近いポンプには、一ぱい人がゐたから、次の所まで歩いて行つたら、又一ぱいでせう、その次の通りのポンプで、やつと汲んで來たの。そしたら、髪の白いよその小父さまが、ゼーゼマン樣によろしくつて仰しやいましたわ」

「大探險をしたわけだな」ゼーゼマン氏は笑ひながら云つた。「だがその小父さまつて誰だらう」

「通りがゝりにわたしを見て、『コップを持つてゐるね、わしにも一杯のませておくれ、この水は誰に持つて行つてあげるのかね』つて云ひました。『ゼーゼマン樣にあげるのです』つて云つたら、大笑ひしながらよろしくつてことづてして、それから又、おいしく召し上れ、と申してくれと云ひました」

「誰だらうな、そんな親切なことづてをしたのは。——どんな小父さまだつた？」

ゼーゼマン氏はたづねた。

「やさしい、よく笑ふ小父さまでしたわ。太い金の鎖から、赤い石のついた金が又ぶら下つたのを持つていらつしやいました。それからステッキの握りにお馬の頭のついた——」

「あゝうちのお醫者樣だ」クララとお父さまは同時に叫んだ。そしてお父さまは、通りのポンプまでコップを持つて水を汲みに行くなんて、友達の醫者が何と思つたらうと考へると、をかしくなつた。

その晩、ゼーゼマン氏はロッテンマイアさんと色々家事の相談をした時に、ハイディは少しも氣がへんな所はなく、クララも大層氣に入つてゐるから、ずつと置くことにしたと申し渡した。

「だから、いろんな點に親切に氣を付けてやつて、多少風變りな點があつても、とがめないで下さい。もしあんた一人の手に負へないやうなら、近いうちに、母がしばらく滯在にやつて來ますから、母にたのめばいゝでせう。母は、あなたも御承知のやうに、人扱ひが上手ですからね」

「はい、かしこまりました」

ロッテンマイアさんは、さう答へたけれど、その聲の調子では、御隱居さまの助けをあまり喜ぶ樣子は見えなかつた。

ゼーゼマン氏はほんのしばらくしか家にゐなかつた。二週間も經つたかと思ふと又もうパリへ發つた。クララはせつかくお父さまがお歸りになつて喜んでゐると、すぐ又お別れしなければならないので、大變悲しく思つた。が、もう二三日もすれば、祖母さまが來て下さるからといふお父さまの言葉に、やつと慰められた。

ゼーゼマン氏が發つとすぐ、その言葉に違はず、御隱居さまからお手紙が來て、明日着くから、これこれの時間に停車場へ馬車を迎へに寄越してくれと書いてあつた。クララは大喜びで、その夜はおばあさまの噂で持ち切りだつた。しまひにハイディもいつしよになつて、「おばあさま」「おばあさま」と云つてゐると、ロッテンマイアさんは不機嫌な顏をして睨み付けた。しかし、ハイディはもう馴れつこになつて、その睨みはあまり利かなかつた。すると、その夜ハイディが自分の部屋に歸るところをつかまへて、自分の部屋に呼び込んで、ロッテンマイアさんは懇々とハイディを諭した。決して「おばあさま」などと馴れ〳〵しくお呼びしてはいけない、必ず「御隱居さま」と申し上げねばならないことなど。

「わかつたでせうね」

ハイディが腑に落ちないやうな顏をしてゐるので、ロッテンマイアさんはぢれつたさうに念を押した。それでもハイディにはどうもわからないのだつた。ペーテルのおばあさんだつて、みんなで「おばあさん」と呼んでゐるのに、どうしていけないのかしら——でも、ロッテンマイアさんがあんまりこわい顏をしてゐたので、もう訊ねないで默つてゐることにした。

十、新しいおばあさま

翌日の夕方には、御隱居さまをお迎へする家中の用意萬端が整つた。これで見ると、この御隱居さまは、よほどみんなから重んぜられ、尊敬されてゐる方らしい。ティネッテは帽子を新しいまつ白なのとこと換へるし、セバスチャンは、家中の足臺を集めて來て、御隱居さまが腰をかけたい時にいつでもすぐに足をのせられるやうに、便利

のいゝ場所へごくばつた。ロッテンマイアさんはまた、いくら强敵が現はれたつて、長年のこの家での自分の權威は、決して侵させはしないぞごばかり、威張りかへつて、何かご監督しまはるのであつた。

さていよ〳〵馬車が玄關に着くご、ティネッテごセバスチャンが急いで階段をかけ降り、その後からロッテンマイアさんがおもむろに進み出て、お客さまをお迎へした。御隱居さまが久しぶりに孫ご對面なさるのによその子がそばにゐてはごの心遣ひから、ハイディは二階の部屋で呼ばれるまで待つてゐるやうにご言附けられてゐた。それで、ハイディは隅つこに坐つて、昨夜教へられたお客さまの呼び方を、一生懸命おさらひしてゐた。するご間もなくティネッテが首を突込んで、だしぬけに云つた。

「勉强部屋へ降りていらつしやい」

ハイディは、お客さまにはちやんごおばあさまごいふ名前があるのに、それにまた「御隱居さま」なごごいふ別の名前をつけて呼ぶなんて、きつごロッテンマイアさんが昨夜何か思ひちがひをして教へたのだらうご思つたけれご、それをもう一度訊きなほすのはこわかつたので、そのまゝ勉强部屋の戸を開けるご、中からやさしい聲がした。

「さあ、來ましたね。こちらへはいつてようくお顏を見せて頂戴」

ハイディは元氣よくそばへ行つて、持ちまへの澄み切つた聲で、さてこそごばかり、

「今晩は、御隱居さまさん」

ご云つたものである。

「おやおや」御隱居さまは笑ひ出した。「お山の方では、人をそんな風に呼ぶのですか」

「いゝえ」ハイディは眞面目な顏をして云つた。「『御隱居さま』なんて名前はこれまで聞いたこごはありません」

「わたしも聞きませんね」御隱居さまは、又笑ひ出しながら、ハイディの頰つぺたを撫でてやつた。「よし、よし子供たちはみんなわたしを『おばあさま』ご呼べばいゝのですよ。それなら忘れませんね」

「えゝそれなら大丈夫ですわ。ペーテルのおばあさんご、おんなじ名前なんですもの」

「まあさうですか」おばあさまは面白さうにうなづいた。それからなほも時々うなづきながら、ぢ

つとハイディを見つめてゐた。ハイディの方も、このお客さまは、一目見た時から、何となくやさしい親切な方のやうな氣がして、大好きだつたので、いつまでもじつと返してゐた。ほんたうに、このおばあさまのものは何から何までめづらしくて、とりわけ、美しいまつ白な髪の毛や、頭巾から垂れた二本の長いレースが、そよ風でも吹いてゐるやうにゆら〳〵と顔のあたりにゆれてゐるのが、ハイディには面白くてたまらなかつた。

「そして、あなたのお名前は？」

おばあさまがたつねた。

「わたし、せんにはハイディだつたのですけれど、こゝではアデライデでないといけないのですつて。ですから、ぼんやりしてゐないで一生懸命――」

ハイディはこの名前にはまだよく馴れてゐないので、急にロッテンマイアさんから呼ばれた時など、ぼんやりしてゐてお返事しないことがよくあることを思ひ出し、ちよつと悄げ込んで、ぽつりと口をつぐんでしまつた。丁度この時、ロッテンマイアさんがはいつて來て、話に割り込んだ。

「御隱居さまも、もちろんわたくしと同じ御考へかと存じます。召使ひに呼ばせますにも、呼びよい名前でないと困りますから」

「ですけれどもね、ロッテンマイアさん、その子は小さい時からずつとハイディといふ名前で通つて來てゐるのですから、わたしはその通りに呼んでやります」

そしておばあさまは、その後もいつも「ハイディ」「ハイディ」と呼んだ。ロッテンマイアさんはそれがしやくにさはつてたまらなかつたけれど、どうするわけにも行かなかつた。おばあさまは、自分の正しいと思つたことは、いつもやり通す方であつたから。その上、眼のよく利く、氣のつく人で、最初この家へはいつた時から、どことなく家の中がうまく行つてゐない氣配を感づいてゐるのだつたから。

翌る日、クララのいつものお晝寢の時間になると、おばあさまはやさしくそばに坐つてねかしつけてやり、それから元氣よく體を起して、食堂へ行つた。そこには誰もゐなかつた。

「おや、お晝寢かね」とひとり言をいひながら、ロッテンマイアさんの部屋へ行つて、戸を叩いた。しばらく待たされて、戸が開くとロッテンマ

ィァさんは、この思ひがけないお客さまに、びつくりして後すざりした。

「あの子はどこにゐますか。そして、クララがお晝寢してゐる間、あの子何をしてゐますか。それが聞きたかつたので、お邪魔しました」

「はい部屋に居ります。ほんたうに、する氣さへあれば、こんな暇に何でも出來ますのに、あの子の考へ出したり、しでかしたり致しますことは、まつたく御隱居さま、こんなに身分の高い御屋敷では、もうお話も出來ないやうな無茶ばかりでございます」

「それは無理もありませんよ。わたしだつて、あんな風に一人でほうつておかれたら、同じことをしでかすかも知れませんよ。あの子をわたしの部屋につれて來て下さい。美しい繪本を持つて來てゐますから、あげようと思ひます」

「そこなんでございますよ、」ロッテンマイァさんは、全く望みはないといふ身振りをしながら云つた。「ほんたうに困つたことで、あの子に本なぞ、てんで用がないのでございます。こちらに上りましてから、こんなになりますのに、まだ『いろは』さへ覺えないのでございますよ。先生にお聞き下さればお分りになりますが、皆目だめなのでございます。やさしい氣の長い先生ですからいゝやうなものの、でなければ、とつくに見放されてゐるところでございます」

「それは不思議ですね。あの子がそんな馬鹿な子とは、わたしには思はれませんがね。ともかくわたしのところへ寄越して下さい。繪を見るだけでも、喜ぶでせうから」

ロッテンマイァさんは、もつといろ〳〵云はうとしたが、おばあさまは急いで自分の部屋へかへつてしまつた。あの悧巧さうなハイディに、少しも字が覺えられないなぞとは、不思議でたまらないので、おばあさまはもつとこのことについて調べてみようと考へた。しかし、あの先生に訊ねることは止さうと思つた。正直で、いゝ人なのだけれど、あの長口上には困るので、まあ敬遠しておくことにした。

日本幼稚園協會編輯　幼兒の教育

會長　東京女子高等師範學校長　下村壽一

主幹　東京女子高等師範學校教授　附屬幼稚園主事　倉橋惣三

日本幼稚園協會規則

第一條　本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス

第四條　會員ハ會費トシテ一ケ月金參拾五錢ヲ醵出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條　幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラルヽモノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ

第七條　本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條　本會ハ左ノ事業ヲ行フ

一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査

一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習會ノ開催

一、雜誌發行（毎月一回）

一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行

一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介

一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第九條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一名　會務ヲ總理ス

主幹　一名　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　若干名　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干名　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第十條　會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第十一條　主幹　幹事　評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推擧スルモノトス

第十二條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルヽコトアルヘシ

第十三條　本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

昭和十四年一月十三日印刷納本
昭和十四年一月十五日發行
幼兒の教育　第三十九卷　第一號
（外國行郵稅は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい）

定價

一ケ月分	金參拾五錢
半ケ年分	金貳圓拾錢
一ケ年分	金四圓貳拾錢
送料	壹錢
送料共	五圓

廣告

特等面一頁	金貳拾圓
二等面一頁	金拾圓
一等面一頁	金拾五圓
一頁以下	御斷り

廣告社に御申込下さい　神田區駿河臺一ノ三品田

不許複製
禁轉載

發行所　日本幼稚園協會　振替口座東京一七二六六番

東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
發行兼編輯者　倉橋惣三
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者　柴山則常
東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　合資會社　杏林舍
東京市小石川區大塚町三十五
東京女子高等師範學校附屬幼稚園內

注文規定

一、本誌御注文の方は凡て前金（郵稅共）で願ひます。（郵券代用の場合には總て一割增）

一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。

一、送金の節には第何卷第何月號より第何月號迄と明記せられたし。

一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

嬉しい今月の手技

その材料並ニ表簿類

◇繪馬額——厚紙製繪馬、クレオン貼紙等でお子様御自身が意匠する歡迎の手技用品。
十枚　金二十五錢

◇菱形——赤白草三色の菱餅を重ねたやうな厚紙臺紙に、縮緬摺紙で雛を折つて貼ります。
十枚　金三十錢

◇屏風形——雛祭又はお人形遊用金屏風。之に貼紙の櫻その他で美しい意匠を致します。
十枚　金三十錢

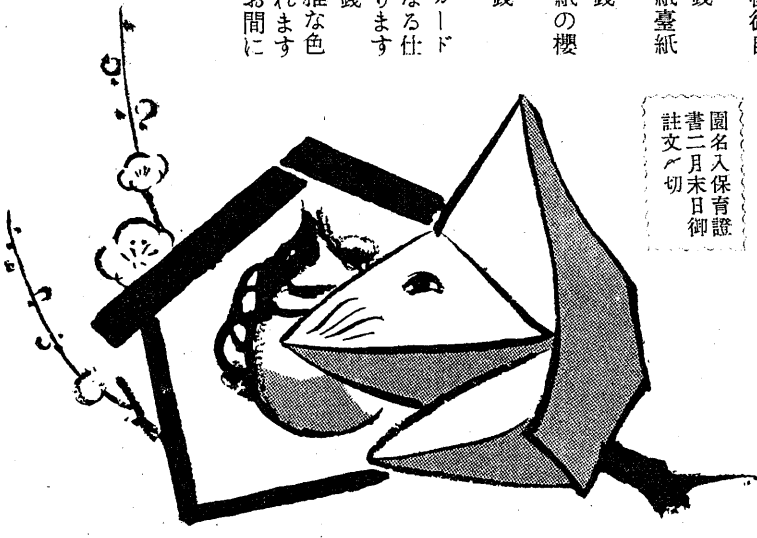
◇出席カード——武井武雄先生揮毫の愉快な美しいカードになる仕組、家庭と共に美しいカードになる仕組、家庭との通信欄、幼兒發育標準表も添へてあります
十二枚一組　一人一ヶ年分　金十五錢

◇保育證書——良質紙に文字を墨、輪廓を金刷と優雅な色刷にした新圖案のものとあり、生年月日を書き入れます
御園名入は二月末日迄に御註文、無名ならば即時お間に合ひます。

一〇〇枚　園名入　金四圓五十錢
五〇枚　園名入　金三圓
無名一枚　金六錢

◇出席簿用紙——一〇〇枚　金一圓二十錢
◇豫定案日誌——一冊(一ヶ年分)　金一圓五十錢
◇在席簿用紙——一〇〇枚　金一圓
◇月謝袋——一〇〇枚　金一圓五十錢

園名入保育證書二月末日御註文〆切



株式會社　フレーベル館

本社　東京・神田・神保町二　話電(33)三六六二番
支店　大阪・東區・備後町五　話電(24)一九三八番